

SURVIVAL GAME



学校、それは俺にとって休息の場だった。そこで眠っていようが遊んでいようが、誰も殺しになど来ない。

そこはあまりにも堅く守られていて、気味が悪いほど平和だった。

そんな場所があるからこそ、俺はまともな精神を保っていられるのかもしれない。

戦場の殺し合いで大幅に狂った精神ねじを、日本へ来て元に戻す。

十七年間、俺はそうやって精神のバランスをとってきた。

スペツナズの仲間たちはこんな馬鹿なことはしない。

彼らは頭の中からつま先までシステムティックに出来上がってしまっていて、精神だの、バランスだのという話は全く通じないからだ。

俺はまだ彼らのようにはなっていないが、

だからと言って殺し合いにスリルを求めているわけでもない。

ならどうして戦場へと向かうのか。

きっかけは親だ。たまたま親父が傭兵だった。

それだけの理由で、俺は物心つかないうちから世界各地の線上を転々とし、キャンプへと放り込まれた。

九歳の時、知らぬうちに人殺しの片棒を担がされてからというもの、そのまま何人も敵兵を殺し続け、

今ではロシア軍の幹部クラスにもぐりこんでいる。

たかが十七歳の、殺戮衝動にすら目覚めていない俺がなぜここまで生きてこられたのか。自分でも不思議に思う。

そして、戦場そのものを大して毛嫌いしていない自分もまた不思議だった。

あそこは確かに異常な場所だ。

しかし、そこが日常になってしまった俺にとっては、むしろ日本にいる方が落ち着かない。

「なあ、兼田。お前大学とかどないする気なん？」

隣を歩いていた葉崎が話しかけてきた。

日本に帰ってきているときは県内の高校に籍を置いているため、こうして学校に通っている。

友人を作るつもりなどさらさらなのだが、この葉崎という男だけは、何かにつけてよく話しかけてくる珍しいやつだ。

「大学には行かない。前に言わなかったか。俺は軍人になる。」

冷たくそう言うと、葉崎の動きが止まった。さわやかスポーツマンを地で行く葉崎の顔は、見ていて少し汗くさい。このまま動きを止めていれば、どこかの体育大学の銅像に見えないこともない。

やや間をおいて銅像が喋った。

「...あのなあ、自衛隊って言うのは常に運動するだけやねんぞ。そりゃ銃とかバズーカ砲とかも使えるらしいけどな、基本的に体育会系のー」

「葉崎、いいから歩け。」

俺に言われて、いそいそと歩き出す葉崎。こいつはいちいち動作がオーバーすぎる。顔は悪くないくせに、動作がマヌケだからあまり格好良く見えないのがマイナス点か。あと髪の毛を逆立てたりするのもよろしくない。直毛のくせに逆立てようとしても、黒いウニになるだけだ。

髪質も硬い方だから余計に鋭く見える。見ていて肩だけは組みたくないと切に思うほどだ。

「何、俺の方見よんねん？」

「俺は自衛隊ではなく、軍隊に行くんだよ。」

無理矢理会話を主軸に戻し、そのまま黒いウニから目を離す。

「ロシアの『スペツナズ』という、特殊部隊だ。お前には時々話をしていたはずだが...忘れたのか？」

また動きを止めてしまう葉崎。本当に銅像にしてやろうか。

「葉崎、いいから歩け。」

俺に言われて、さっきと同じように歩き出す葉崎。

「忘れるも何も、ただの冗談やと思っとったぞ！」

「それはお前が悪いな。」

「ちゃうで、冗談っぽく言ったお前が悪いんや！」

俺は葉崎の足をかけた。当然つまずいて見事に転倒する。
しかし葉崎はスポーツマン。見事に受け身をとって一回転、俺の1メートル前でスクリと立った。
素晴らしい前回り受け身だ。

「何すんねん！」

「葉崎、制服汚れまくり。」

「うぎゃああっ！マジや！うわっ、畜生っ！」

ぐだぐだ言いながら制服の背中をはたく葉崎。俺も友達らしく手伝ってやる。

「サンキュ、兼田。」

本当に感謝、という感じの葉崎。

「いや、別に。ところで葉崎、俺はお前に冗談っぽく軍隊の話をしたことがあったか？」

少し考えた後「そういやなかったかなあ。」と呟き始める。...おい葉崎、俺への怒りはどこへ行った？

そのまま何事もなかったように学校に着いてしまうあたり、葉崎の将来に一抹の不安を感じるばかりだ。

昇降口だろうが廊下だろうが、葉崎の口は止まることを知らない。
自分の志望する大学のことをベラベラベラベラ喋っている。
話すことが好きなのか、話を聞いてもらうことが好きなのか。どちらにせよ俺は聞き流すだけだ。

「...っつー訳で、最高の設備が揃っとる訳よ。でな。」

いつまで続くのか。もう一回足をかけてやろうかとも思ったが、たくさんの生徒が徘徊する校内で、
あれをやってしまうのは少し可哀想か。もう少し程度の軽いことをやってやろう。

などと考えているうちに、自分のクラスについてしまった。
普通棟三階、三年四組。どこかの馬鹿がクラスプレートをいじっていない限りはここが俺のクラ

スだ。

ちなみに、隣にいる葉崎も同じクラス。教室に入れば席が離れているのでマシンガントークに悩まされることもない。

さらに俺の席は窓側最後列。安心して朝のHRまで眠ることが出来るわけだ。

自分の疲れをそのまま置くように鞆を机に捨て、椅子にだらりと腰掛ける。
なんで俺は朝からこんなにも疲れているんだ。

無意識のうちに葉崎を睨んでいると、やっかいなことに葉崎と目線があってしまった。
突如始まるガトリングガントーク。毎分千二百文字は軽いそのファイアーレートに俺は圧倒されるばかりだ。

席四つ分は離れているのに、奴の声はしっかり俺の耳に届いてしまう。
こいつを演劇部の連中にでも売り払ってやろうか。

チャイムが鳴る。しかし葉崎のマガジンはまだ尽きない。
一体その少ない脳味噌のどこにそれだけの話題があるというのか。
早いところ担任の日下部が来ないと、俺の耳がイカレそうだ。

今度は校内放送がなる。それでもやはり葉崎の喋りは止まらない。

「生徒諸君、楽しいゲームの始まりだ。」

葉崎の声がやかましかったが、スピーカーからは確かにそう聞こえた。
しかし訳の分からない内容なので確信が持てない。
とりあえず俺は、隣の奴にさっきの放送の内容を聞いてみた。

「...さあ、なんか、楽しいゲームが始まるって聞こえたけど...何かな？」

...やはり『ゲーム』とやらが始まるらしい。
しかしよく意味が分からないな。
クラスの大半は、訳の分からない放送にただ笑ったり、ザワザワと相談してみたり、
無視して授業の予習をしていたりする。

「あれ、校長先生の声だよなあ？」

斜め前の男子生徒がそう呟いた。どうやら放送者は校長らしい。
この高校の校長がアホだという噂は結構耳にしていたが、まさかここまで狂っているとは思わなかった。

なにが『ゲーム』なんだか。

未だ続いている葉崎のガトリングガントークを無視しながら、俺は『ゲーム』について色々考えていた。

今は四月の後半だから、行事らしい行事はないはずだ。

何より『校長が直々に放送した』というところが解せない。

校長が気違いだと判断すればそれでいいのだが、何となく、嫌な予感がする。さっきの放送のあと、

未だフォローの放送が流れていないから、余計にそう感じるのだ。

ガラリと教室のドアが開く。俺の考えと、葉崎のガトリングガントークはここで終了した。

「あー、静かにしろ。」

クラスはさっきの放送の話題でやかましく騒いでいる。

ドアから入ってきたこのクラスの担任、日下部は、フラリと教室内を見回した。

表情が緩んでいる。何かおかしいことでもあったのだろうか？

「先生に言われないと、静かになれないのか？」

小さい声で呟きながら、もう一度教室を見回す。

そして出席簿と生活日誌を机に置き、その右手をポケットに入れた。

「なんか、いつもとちゃうなあ、あの先生。」

遠くの葉崎が口パクで俺にそう言った。確かに俺もそう思う。どこかおかしい。

...満足というか、余裕というか、そういう雰囲気の日下部から感じられるのだ。

「まあいいや、ゲームを始めよう。」

日下部がだらしなくそう言うと、前列の集団が爆笑した。

しかし日下部は怒る様子でもなく、ただポケットからその手を出す。

「始め。」

ぼそりと呟いた日下部の手が、最前列の生徒へと向けられた。

一斉に騒ぎ出すクラス。驚いた事に日下部の手には拳銃が握られていたのだ。

その銃口はこちらを向いていて、いつ発砲してもおかしくない。

日下部は手に持っている拳銃のトリガーに指をそえる。

次第に大きくなっていくクラスのざわめき、それをかき消すかのように一発目の銃声が響いた。

一瞬の静寂が支配する教室の中で、日下部の目の前にいる生徒の頭が揺れる。

そのまま体が傾き、崩れた。

一人の女子が叫び、その声を合図とした様にクラス全体が驚きと恐怖に包まれる。

泣き叫ぶ者、席を立ち逃げ出そうとする者、恐怖に縛られて身動き一つとれない者、色々いる中、日下部はただ笑いながら拳銃を鳴らし続ける。

俺はとっさに身を伏せ、周りの机でバリケードを作った。

幸い俺の席は最後列だったので、銃弾に当たる確率はかなり低かったが、

跳弾がしきりに飛んでくるので必ずしも安全とは言えない。

日下部は逃げようとした者から撃ち殺していったらしく、教室のドアや窓の付近に人間の山が見える。

数にしておよそ五ぐらいだろうか、まるで壊れた人形の様に無造作に重なっている。

バリケードの隙間から日下部の様子を伺っていると、突然窓ガラスの割れる音が教室に響き渡った。

廊下側の窓から逃げたそうとした生徒がガラスを破壊したらしい。

当然窓ガラスを割った生徒は日下部に撃たれたが、

その撃たれた死体を踏みつけて他の生徒が赤い窓から逃げ出していった。

狩る方がたった一人なので、時間と共に脱出者が増えてくるのは当然か。

俺も窓際ではあるが、こちらに廊下はなくあるのは地上十メートルの空だけだ。

安全に降りられる保証はない。

運悪くこちら側にいた生徒は、自殺覚悟で飛び降りるか、ドアまでの遠い距離を走り抜けるか、

それだけしか逃げ出せる方法がないのだ。日下部もそれが分かっているのか、こちら側の生徒を狙わない。

ただ窓側の生徒を狩り続けている。打ち始めてからもう十六発目だ。まだ日下部の弾は尽きないのか？

しかしその十六発目を境に銃声が止んだ。

不意に訪れた静寂を切り裂くように、さっきまで銃声にかき消されていたクラスメートの悲鳴や泣き声が教室中に響きわたる。

ふと周りを見てみると教室の右半分、つまり窓側の生徒が全て死んでいた。

数がそれほどないことから、他の生徒は窓からの逃走に成功したと思われる。

当日下部は教室を見回しながら左のポケットをゴソゴソとあさり、何かを探している。それをチャンスと思ったのか、一人の男子生徒が日下部に飛びかかった。しかし日下部はすぐに右手の拳銃をその生徒に向け、トリガーを引く。

一発の銃声と共に男子生徒が床に倒れた。体がくの字に曲がっているの、撃たれたのは腹部だろう。蛙のようなうめき声を上げながらのたうち回っている。

「ビビらせやがって……。」

そう言い捨てて日下部は倒れている男子生徒の腹を蹴った。

呻き声と悲鳴をあげる男子生徒。周りからも同じ様な声が聞こえる。俺は今頃になって恐怖というものを感じ始めた。

何故日下部は俺達を殺そうとしているんだ？これが放送で言っていた『ゲーム』だというのなら、

あまりにも狂気じみた話だ。

何も知らない生徒を玩具のように、それこそテレビゲームのように惨殺するなど許されるはずがない。

しかも教師が生徒を？普通逆だろう。何故教師が俺達を殺す必要があるんだ？

色々考えてはみるものの、いつ狙われるか分からない恐怖感が俺の思考をジャマして、まとまった考えが出せなくなっていた。

そんな俺とは正反対に、日下部は鼻歌を歌いながら左のポケットからマガジンを取り出し弾薬を再装填している。

こんな状況で鼻歌を歌うなんて、異常だ。薬で狂っているとしか思えない。

新しいマガジンを入れ、そのまま狩りを続行する日下部。

奴の銃を覗んでみると、その銃がグロック17であることが解った。

テクニカルデータ、グロック17。口径九ミリ×十九、全長約百八十五ミリ、重量約六百二十グラム、装弾数十七発十一発、グロック社製。部品の大半が強化プラスチックで製造された新世代の銃。トリガーにセーフティを組み込んでいるため、慣れないと扱いが難しい。米国警察特殊部隊SWATや各地域のテロリストなど、実に幅広く使われている銃だ。

何故、ただの冴えない数学教師がグロックなどを持っているんだ？

警官から盗んだニューナンプ等ならまだしも、銃規制の強い日本ではかなり入手しにくい部類に入るグロックなんて。

まあそんなことはあとから考えればいい。

今も狩られ続けているクラスメイトの泣き声をどう止めるか、それが第一だ。
時間と共に死体は増え、日下部の発砲数は最初のマガジンを含めて二十を越えた。
グロックの装弾数は十七発だから、あと十五発も待たなければいけない。
つまりはあと十五もの死体が作られる、と言うことか。

俺が絶望的な推測をしていると日下部の銃撃に変化が訪れた。
二十一発目の銃弾が床に刺さり、二十二発目の銃弾は壁にめり込んだのだ。
生徒の数が減ってきたからか、日下部の命中率が下がってきたらしい。

しかし日下部は教壇から降りずに、遠距離射撃を楽しんでいる。
机の隙間を縫って生徒を殺すことが楽しいらしい。
バリケードで防御してある俺の場所が銃弾の餌食になることはないだろうが、その分目立って見えるはずだ。
日下部がかなり狂っているおかげで未だ注目はされていないが、怪しまれるのも時間の問題だ。

教室には相変わらず銃声が鳴り響き、呻き声がこだましている。
みんな、こうなることなど思ってもみなかった連中だ。そして俺もその一人。
吐き気がするほど平和だったはずの学校が、一瞬のうちに処刑場に変わり果て、クラスメイトが殺されていく。
この状況を他の生徒は飲み込めるのだろうか？
あまりに無抵抗なまま殺されていくクラスメイトを見ていると、彼らはすでに自分が死んだと思こんでいるのではないか...とってしまう。

二十七発目の銃弾が机にめり込み、その机に隠れていた生徒がビクリと震える。
叫び声を上げる間もなく、二十八発目の銃弾がその生徒に撃ち込まれた。
ガタガタと周りの机を揺らしながら体を崩し、そのまま床に赤い血だまりを作る。
その生徒の呻き声を無視して、日下部が甲高く笑い「狙撃成功！」などと騒ぎながら次のターゲットを探し始めた。

教壇から降り、アクションゲームの主人公さながらに銃を構えながら、残りの生徒を捜し回る。
見つけては銃殺し、その死体を蹴り回していった。

当然、俺の作った怪しいバリケードが搜索対象から外されるわけもなく、
日下部の銃口が俺のバリケードに向けられた。
そして足音をならしながらこちらへ近づいてくる。
しかし視線はこちらに向いていない。どうやら他の生き残りが気になるらしい。

しきりに机を倒したり、椅子を蹴飛ばしたりして生徒を捜している。
だが日下部は、見つからない焦りからか既に銃殺されている死体にまで弾丸を撃ち込む始末だ。

やがて捜索対象が絞り込まれ、残るは俺のバリケードだけとなった。
しかしだからといって他の生徒が全て死んでいるわけではないだろう。
上手く死体の下に潜り込み、日下部の捜索を免れた生徒もいるかも知れない。

確実に生徒の気配がするからか、嬉しそうに鼻歌を歌いながら近づいてくる日下部。
ラリってはいながらも、しっかりこちらのバリケードを睨んでいる。徐々に距離が縮まっていくが、
俺は逃げずにただ待つのみ。

「そこにも一人、いや二人、それとも三人かなあ...」

イカれた声でそう言いながら、ついにバリケードの手前まで来た。
そこで三十三発目の銃声。そして机に弾がめり込む音。これで俺を怖がらせているつもりなのだろうか...

今度はバリケードの隙間に銃口を突っ込んでくる。
横から回り込めば確実に俺達を殺すことができるのに...日下部はどこまでも狂っているらしい。
グリグリと銃口をうねらせ、バリケード内の俺を怖がらせる日下部。
俺はその銃口を右手で掴み、ひねる。

バリケードの前で狼狽える日下部、混乱したのかそのままトリガーを引いた。
だが捻り上げた手首で人が狙えるわけもなく、銃弾は床に突き刺さる。その音を聞いた俺は、
焼ける右手を離さずにバリケードもろとも日下部に蹴りを喰らわせた。利き足の右だ、半端な威力じゃない。

虚をつかれた日下部は、およそ五つほどの机に潰されながら床に倒れ込んだ。
ついさっきまでは生徒を処刑していた男が、今は惨めに机に埋もれ、床でもがき回っている。

ガタガタとやかましく鳴り響く机達の音を聞き終わる前に、俺は手近にあった椅子を掴んだ。
そしてそのまま日下部へと振り落とす。...腹に一発、足に二発、腕に二発、背中に二発。

血の海。...しかし急所は外したから、もとい死なないような殴り方をしたから、命に別状はないはずだ。

見た目はかなり死体っぽいが、きちんと呼吸もしているし歯も食いしばっている。
恐怖に怯えるその目つきには、生を表す眼孔が確かにあった。

俺は日下部の髪を掴む。血だらけでズルズルと滑るが、かまわず指に絡ませて無理矢理髪を引

っ張る。

日下部の顔が持ち上がり、その情けない目が俺をとらえた。

「何のマネだ？」

言いながら俺は膝をつき、日下部と同じ目線へと腰を下ろした。

しかし、俺の言葉に日下部はただ震えるばかりで何も話そうとしない。

そのまま床に思いっきり叩きつけてやる。髪の毛が何本も抜けるが、この際あまり気にしない。
どうせこいつは社会復帰できないだろうから、いくら禿げても大丈夫だろう。

「何のマネなんだ？」

もう一度繰り返すと日下部は、その苦しそうな表情で一言「ゲーム。」と答えた。

まともに喋ることすら困難であろう顔面の傷に耐えながら、よく声が出たと思う。この調子でもう少し、喋ってもらおう。

「校長が仕組んだのか？」

答えることの出来ない質問なのか、それとも単に傷が痛いだけなのか、日下部は何も喋らない。ただ痛みに顔を歪ませ、ガタガタと震えている。

今度は掴み上げた髪の毛を離し、そのまま床に落としてみた。
ゴシャッ、と言った感じの音が鳴って日下部の前歯が折れる。多分鼻も折れただろう。
床の血がさらに容量を増していく。

痛みに反応したのか、床を転げ回る日下部。本当に惨めだ。こんな奴に生徒を殺す決心などあるはずもない。
やはり校長に言われて殺戮へと走ったのだろう。そして景気付けに麻薬に走った、と言ったところか。

「動く...な。」

しばらくもがき回った後、日下部は苦しそうにそう言った。
目の前には、バリケードを蹴飛ばした際、日下部が取り落としたはずのグロックが構えられている。
さっき床を転げ回ったときに拾ったのだろう。

「グロックの装弾数は十七発。それに弾は入ってない。」

俺の言葉に日下部が笑う。狂気に取り憑かれたように笑う。

「俺はあらかじめチャンバーに一発入れていたんだよ。」

勝った、と言わんばかりに大笑いする日下部。

...十七発+一発、チャンバーに弾が入った状態で新しいマガジンを入れれば装弾数は十八発からスタートできる。

日下部はその状態で生徒狩りを始めたらしい。

「グロックはな、弾を撃ち尽くすとスライドが後退したままになるんだよ。ところがこの銃を見ても、スライドはちゃぁんと元に戻ってるだろう？まだ一発、残ってるって事だ。」

得意そうにグロックの説明を始める日下部。

ついさっきまで死にそんな顔をしていたのに、調子のいい奴だ。はっきり言ってムカつく。

「なら撃ってみればいいだろう。」

俺の言葉に、日下部の笑いが止まる。

そしてバカにしたように俺を見下しながら、その銃口を俺の目の前に持ってきた。

「死ぬぞ。」

「そのセリフは、安全装置を外してから言え。」

ハッと気付いたようにグロックの安全装置に手を伸ばす日下部。

しかしその手の先に安全装置などあるはずがないのだ。

俺は、オタオタと安全装置を探す日下部の顔面（正確には右目）に拳を殴り入れた。

床と平行に飛ぶ日下部、その衝撃でグロックを取り落とす。

ガシャリとグロックの落ちる音がして、そのあとに日下部の倒れる音が響いた。全身血だらけなので、

床が赤く染まる。

俺は落ちたグロックを拾い、そのまま日下部に向けた。

「日下部、グロックの安全装置は？」

俺の声を無視してのたうち回る日下部。よほど右目が痛いらしい。
話を聞いてくれないので腹にも蹴りを入れてやる。すると呻き声と共にこちらを睨んでくれた。
開かない右目を押さえながら、あと一つの眼球でしっかりとこちらを睨みつける日下部。

「グロックの安全装置はトリガーに組み込んであるんだよ。」

その日下部の目の前でグロックのトリガーに指を添え、そのまま銃口を日下部の左目へと向ける。

「だから、強く引き金を引くだけで安全装置は外れるんだ。」

恐怖に引きつる日下部。全身の痛みも忘れて凍り付く。

「狩られる気分は？」

そう言いながら俺はトリガーを引いた。銃声が響く。
日下部の叫び声も響く。そして最後にベチャリと、人の倒れる音が残った。

「おめでたい奴だな。」

床に突き刺さった弾丸を見ながら、気絶している日下部のポケットを調べてみる。
...グロックのマガジンが三つ。日下部が使い切ったのを合わせると5つになる。
弾数にして五十一発＋一発か、確かに三十人編成のこのクラスなら楽に殺せる数だ。
これだけ大量の弾を持ってくるぐらいならアサルトライフルを持ってきた方が効率がいいのに、
何故日下部は拳銃で俺達を殺しに来たのだろうか。これも『ゲーム』とやらの一環なのだろうか。

日下部の衣服を全て調べ、靴の中まで調べてみたが、これと言って情報になるものはもう何もない。

俺はとりあえず日下部から目を離し、教室を見回してみた。

響き渡る呻き声。耳を貫く鳴き声。血と硝煙の匂い。
そしてクラスメイトの死体、死体、死体。

俺は改めてこの場所が学校の教室であることを思い知らされた。

日下部と対峙していたその一瞬だけ、俺は戦場にいたらしい。

こんな形で戦場の経験が役に立つとは、人生とは本当に解らないものだ。

そして同時に思う、人とは住んでいる環境ひとつでどこまでも残酷になるものだな、と。

俺は怪我人の手当を始めることにした。

もっとも、生きている人数など微かだとは思いますが、その数をゼロにする気はない。
しかし俺一人で何人もの手当が出来るわけではないので、多少なりとも人手が必要だ。

「怪我人の手当てがしたい、誰か手伝ってくれ！」

俺の声が静かな教室に響きわたる。が、誰も起きようとしなない。

少し待ってみたがやはり誰も動く気配がない。

動く事すら出来ない程の恐怖に縛られているのか、ただ単に全てが嫌になったのか解らないが、
こんな所で時間を食わされては困る。

今にも死にそうな重傷者がいるかもしれないのに……このあたりが日本の一般高校生と言うことか。

頼むから自分から名乗り出してくれよ。

俺は空になったグロックに新しいマガジンを装填する。

呻き声のみの教室に、ガシャリと冷たい音が響いた。そしてスライドを鳴らし、天井に向けてトリガーを引く。

やかましいほどの銃声。その音に驚いてビクリと震える死体が数名。

死んだフリを止めさせるため、俺はその死体に近づいていった。

「どこを撃たれた？」

またもビクリと震える。俺が無理矢理引き起こすと、ようやく人間らしく口を開き始めた。

「僕は、撃たれなかったみたいだ。」

「なら他の生き残りの手当を頼む。」

そう言い捨てて、俺も他の生き残りを捜し始める。

しばらくするとさっきまで死んだフリをしていた生徒達が、スイッチが入った電池玩具のように動き始めた。

ざっと見るに、四…五人か。男子二人に女子三人。

中には腕を撃ち抜かれた者もいる。しかし応急処置さえすれば、いくらかは動けそうな奴ばかりだ。

もうクラス全員が死んだのかと思っていた俺は、幾分か救われた気分になった。

立ち上がった生徒達を集めて軍隊流の応急処置を教え込むと、生徒達はそのまま、死人のように動き始め、怪我人の応急処置に向かった。もはや日下部の処刑パーティで希望を失っているのか、友人の死体を見つけても鳴き声ひとつ上げない。多分こいつらも、生きている実感がまるでないのだろう。涙と恐怖でグシャグシャになった顔は表情を無くしたように凍り付いている。

重傷者の捜索は思ったより早く終わった。と言うか実際のところ、さっき立ち上がった生徒以外に重傷者と呼べる者がいなかったのだ。当然と言えば当然だろう、日下部が狙っていたのは『頭』。あたれば確実に死ぬしかないのだ。脳を撃ち抜かれて騒いでいる人間など見たことがない。

名簿をもとに生徒数を調べてみると、クラス三十人中十六人が死亡、九人が逃走、そして今ここにいる五人が軽傷、という結果になった。日下部も派手に殺ってくれたものだ。

「兼田君...。」

不意に呼ばれる声がして、俺はその方向へ振り返ってみる。そこには、さっきまで生存者探しに勤しんでいた女子三人がいた。

「どうしてこうなったの？」

「俺に聞かれても困る。」

女子三人の目線を半ば無視しながら、俺は自分の考えを進ませる。校長の放送で『ゲーム』とやらが始まったのは確かだ。あれが校内全てに放送されたとすれば、他のクラスも同じように今狩られている訳か。だとすればこのクラスの隣、つまり三の五も全滅？

「ねえ、私たち、これからどうすればいいのよ？」

いちいちうるさい奴だ、そんなもの自分で決めればいいだろう。しかしまあ、何も知らない一般人にそれを言うのは酷というものか。こいつらを下手に動き回らせても、他の教師に狙われる危険がある。しかしこの死体まみれの教室で隠れるとなると、それも精神的にキツイ。

「とりあえず今は、下手に動かない方がいいな。」

「ここで何をしてろって言うのよ！」

ヒステリックに叫び始める女生徒1。残りの二人は相変わらず俺を静かに睨んでいる。

「俺だって事態が把握できてない。叫んでも無駄だ。」

三人の女生徒が俺を鋭く睨む。

全ての怒りや悲しみを俺に吐き出しているらしいが、相手を間違えられても困る。俺がお前達に何か危害を加えたとも言うのか？俺は続けてもう一言言ってやる。

「お前達が怒るべき相手はこいつだろう。」

言いながら日下部を指さす。しかし女生徒はその目を俺から離そうとしない。それどころか、睨みレベルがさらに上がった気がする。

「死体になに何言っても無駄じゃない！」

「気絶しているだけだ。口元に手を当ててみれば解る」

そうやってやったが、その場から一步たりとも動こうとしない。確かめるのが怖いのだろう。ガタリと遠くで音がした。

生き残りの男子生徒1だ。その男はこちらを見ながら、半ば諦めたような表情で近づいてくる。

「お前はいいよ、強いから。でも俺達はお前じゃないんだ。」

弱い自分への言い訳だろうか、それとも強い俺への嫉妬だろうか。その男子生徒は俺を説得するかのよう語り始める。

「俺達はお前が先生を殺すことによって、助かった。でもこれから俺達はどうやってこの学校から逃げ出せばいいんだ？多分、俺が思うにこの学校では校長先生が言ってた『ゲーム』が始まっているんだと思う。そしてそれは俺達を皆殺しにする『ゲーム』だ。」

そんなことは分かっているんだ。俺が考えているのはその『ゲーム』の目的だ。奴らの狂った目標が何なのか、と言うことだ。

そういえば...葉崎の奴はどうなったんだろうか。

俺は男子生徒への回答を保留して、葉崎のことを思い出した。

さっき死体の人数を数えたときには葉崎の姿はなかった。

つまり窓からの逃走に成功した、ということだ。

少し安心したがその分、他の教師に狙われているかも知れない、と言う心配が重くのしかかった。

。

俺が心配したからと言ってどうなるわけでもないが、とりあえず生きていることを願うばかりだ。

。

「兼田、聞いているのか？」

「もちろん。」

大嘘叩いて胸を張る。しかし男子生徒は信じてくれたらしく、再び内容の薄い現状報告を話し始めた。

「...もしかしたら今も、先生が俺達を狙っているかも知れない。でも俺はお前みたいに強くないから、自分すら守ることが出来ない。俺達はまた、さっきみたいな恐怖を味わわなければならないんだ。」

当然だろう。ここに隠れ続けるにしても、それなりの覚悟は必要だ。

俺にはこいつの言いたいことが何なのか、いまいちよく解らなかった。

「お前は俺達五人を一度に守れるか？...無理だろう？だから俺達はやっぱり生き残ることが出来ないんだ。」

いい加減ムカついてくる。自分が弱いことを露呈して、何が楽しいのかわからない。

弱ければ死に物狂いで生きるぐらいの意志を持てばいいじゃないか。

「何が言いたい？さっさと言ってくれ。」

俺の言葉に男子生徒1は「何も分からないんだな。」とでも言いたそうな表情をした。

それが俺をさらに苛立たせる。俺は言ってやった。

「死にたいならさっさと死ね。俺は生きる意志のある奴だけを助けるつもりだ」

「なら何で俺達を助けたんだよ！」

...その言葉を聞いて、やっとコイツの言いたいことが理解できた。
つまりは「もう二度とさっきみたいなコワイ思いはしたくないんだ。
あんな思いするぐらいなら、さきに死んでたほうがよかったよう！」というわけだ。
生の有り難みを知らない、恐怖に負けた人間か。

「そうか、悪いな。すぐ殺すから、待ってろよ。」

俺は言いながら銃口を男子生徒1に向けた。

「おい...？マジかよ？」

「死にたいんだろう？」

「...やめー」

俺はトリガーを引いた。銃声が教室中に響く。
あまりにも早い展開に、周りの生徒は何が起こったかも分からないようだ。

「.....、.....。」

口をパクパクさせながらマヌケ面で俺の方を見続ける男子生徒。
彼のはるか後方の壁にはしっかりと鉛弾がめり込んでいる。

「生きたいからこそ恐怖を感じるんだろう。」

男子生徒は反論してこない。しかし周りにいた四人が、明らかに奇異の目で俺を睨んでいた。
こいつらの脳に「兼田に救われた。」などという記憶は残っていないだろう。
今ある確かな感情は、怒りと、恐怖だ。

「俺に殺されたくなければ、死に物狂いでこの学校から逃げ出せ。」

男子生徒がその場に崩れ、他の生徒達がそろって凍り付く。
それを無視して俺は廊下へ歩いていった。
ガラリとドアを閉めて少し待つと、そのドアの奥でザワザワと騒ぐ声が聞こえ始める。
どうやらやっと生き抜く決心がついたらしい。

俺はとりあえず一息ついた。だが気を抜くことは許されない。

ここは廊下だから、かなり見通しがいい。つまりそれだけ見つかりやすいということだ。

しかしこの教室に戻る気にはなれない。これ以上あいつらの世話を焼いている暇などない。

一般人にはインパクトが必要だ。生温い世界を歩いてきた人間に、俺が何を言おうと何も伝わりはしない。

死の恐怖を一度や二度味わった程度で集団自殺に走られては、あいつらを助けた意味がまるで無いじゃないか。

(もっとも、あの連中に集団自殺する勇気があるとは思えないが。)

しかしだからといってこんな陳腐な芝居をする必要もなかったかも知れない。しかし構うこともないだろう。

あいつらのためにも、早いところこの騒ぎにケリを付けなければならない。

俺は三步右側に歩き、隣のクラス『三の五』のドアの前に立った。
声、音、共に聞こえない。人の気配すらない。
ドアを数ミリ開けて、ブービートラップの有無を確認した後、俺は慎重に三の五への進入を開始した。

教室を見回すと誰もいない。争った跡もない。死体も弾も血痕すらない。
このクラスでは生徒狩りは行われなかったのだろうか？
生徒の鞆が置きっぱなしにされているので、全員が揃って休みだったわけではなさそうだ。
と言うことは、日下部とは別の方法で始末したか、それとも教師が寝返って生徒達を逃がしたか、
そのあたりの理由になるだろう。

これ以上収穫はありそうにない。そう思った俺は足早に三の五を出ることにした。
鞆に足を取られぬよう気を付け歩いていると、ふと妙な光が目に入る。
最初は日の光が何かに反射しているのだろうかと思っていたが、その光は動いていた。
床のあたりを照らしながら、俺の足下あたりを行ったり来たり。明らかに不審な光だ。
光を追って天井へと視線を向けると、いきなり何かが激しく光った。マグライトの光だ。
先刻の床の光もこれだったのだろう。
俺は上を向くことによって直に光源を見てしまったらしい。
少し目がちらつくが、動けなくなるほどではない。
俺はとっさに床を蹴り、その場から離れた。
多分俺の視力を奪うつもりだったのだろう。
そして俺は、もう一度バックステップを踏み拳銃を天井に向けて構えた。
ちらついていた俺の視力は一瞬にして回復し、光源の主の姿がはっきりと俺の目に映る。
天井には穴が空いていた。何かで切り取られたような丸い穴だ。
その奥にはマグライトでオロオロと俺を捜している男が一人、生徒か教師か判らない様な顔だ。
さっきと同じように床へマグライトの光を当ててて何かを探しているようだ。大体は予想できる、俺だろう。
しかし今は真っ昼間だというのに、何故マグライトなど使うのだろうか？
俺の目を眩ますことが目的なら、スタングレネードをぶち込んだほうが早いだろう。
考えながら銃口を間抜けな男へと向ける。
奴は俺と全く逆の方向を捜しているから、今なら天井の穴を縫って奴の顎を撃ち抜くことが出来るだろう。
しかしそこでふと考え直す。
別に殺す必要はないじゃないか。

奴がたとえ敵であったとしても、持ってる物はマグライト一つ。
武器を携帯しているとしてもあんなマヌケではまともに扱うことは出来ないだろう。
このまま気付かれないように教室を出れば弾の節約にもなる。

「よし、あいつは無視だ。」

ぼそりと呟き、奴の死角からゆっくりと教室のドアへ向かう。
奴が天井の穴から頭を乗り出さないのは幸運と言えるだろう。無論、乗り出せば撃ち抜くだけ
だが.....

(それにしても...あいつ、一体何をしていたんだ?)

そんな事を思いながら廊下まであと数メートルの位置まで詰めていた。
すると不意に天井から足音が聞こえた。そして男の声。

「おい、何遊んでるんだ？見張りもまともに出来ないようならこの場で速攻、撃ち殺してやっ
てもいいんだぜ。」

『撃ち殺してやっってもいいんだぜ。』と、言っている以上、この男が持っているのは銃だろう。
だとすればやっかいだ。
さっきの間抜け野郎は俺のことに気づけていただろうし、その事をこの男に報告するだろう。
そうなれば、必ずここへ降りてくる。

「す...すみません。でも、あの...さっき人が.....。」

酷く震えた声のした後、強い足音と共にマグライトを照らしていた男が倒れた。
穴からは詳しく見えないのだが、そんな雰囲気を読み取れたのだ。
銃を持っている（と思われる）男が、蹴り倒すか突き倒すかしたのかもしれない。

「本当だな？嘘だったらお前は死ぬー」

その言葉を最後まで聞かぬうちに震えた声の男が叫んだ。

「本当です！さっきまでは...。」

少し間をおいて、また声。

「あん？……って事はお前……見失ったのか？」

「は…はい。…でも！……まだ下にいると思います。」

「へえ……。」

男達の会話を聞いている間、俺は少し急ぎながら廊下へ向かっていく。奴らが降りてくる前に早いところこの教室を出なければならないのだが、人間二人の死角などそうそうとれるモノではない。

俺はかなり遠回りをしながら廊下へ向かうルートを取った。

多少時間がかかっても、奴等に見つかるよりはマシだ。

しかし、そんな俺の考えは奴らの穴から出てきた小さな鏡によってあっけなく崩されてしまった。

「見つけたぜ…。」

その鏡には、男の顔が映っていた。つまり俺の姿が奴らにばれたということだ。俺は足音など気にせず、とにかく急いで廊下へ向かう。周りの机や椅子が鬱陶しいが、それも気にせずドカドカ走る。

「逃げんじゃねーよ！」

いいながら男が飛び降りてきた。その両手にはショットガンが握られている。机の上に、派手な音を立てながら着地する男。思ったよりバカなのかも知れない。

「…つぁ…いたたたた。畜生！どこー」

「動くな、黙れ。」

あまりにもあっけなく王手を決めてしまった。俺の構えるグロックの先で悔しそうにこちらをにらみつける男…いや、こいつは確か二年の学年主任だ。

若めだが規則にうるさく、大半の生徒に嫌われていたが、その分真面目な生徒には受けがよかった…そう記憶している。

「兼田か、センセーに銃を向けるなよ！」

かまわず右手を撃ち抜く。痛みに叫ぶ学年主任、ついでにショットガンも取り落とした。

「黙れと言っただろう？」

「いてえっ！マジ痛すぎ！やってらんねーよ！」

俺の話など聞くこともせず、ひたすら痛がる。

この学年主任、ここまでおかしい奴じゃなかったはずだ。

...となると、こいつも日下部と同じように薬か何かを使った、もしくは使われたのだろうか。

しばらく叫びまくった後、痛み故に狂ったのか、それとももともと狂っているのか、俺のグロックを無視して自分のショットガンを取ろうとする学年主任。

「死にたいのか？」

言いながら左手も撃ち抜く。するとさらに叫き声を大きくした。

「ぎいやあぁうッ！止めてくれよ兼田ぁ！」

こいつに正常な意識はもう無いのか？ 痛みによる恐怖を忘れるほど狂っているとでも言うのか？

苦しそうに俺をにらみつけ、穴の空いた右手でポケットを探り出す。

悪戦苦闘しながらもポケットから目当てのものを取り出し、俺に向けた。

「死ね！死ね！殺されろ！」

叫びながら近づいてくる。

もはや人間ではない。

俺の目の前にいるのは、ただの野生化した猿だった。

俺は迷わず銃声を鳴らす。猿の脳が飛び散った。

救いようのない猿は右手に握っていたボールペンをカラリと落とし、そして自分自身をも床に落とした。

ガラガラと机が鳴り、猿の周りが赤く色付けされていく。

俺は天井へと銃口を向けたが、既にそこには誰もいなかった。

一息ついた後、こいつの持っていたショットガンを調べてみる。

この独特の形はM1スーパー90...、だろう。

テクニカルデータ、M1スーパー90『エントリー・ガン』。口径十二ゲージ×三インチ、全長約九十センチ、重量約三キロ、装弾数九発十一発、ベネリ・アーミ・オブ・イタリ社製。イナーティア・ロッキング・リコイル・システムを採用し、装填および排筒不良が起こらない実践的なセミ・オートマチック・ショットガン。ポンプアクションでない上、反動もかなり少ないということでSWATが制式採用している銃だ。

グロック17、M1スーパー90...どちらもSWATでよく使われている銃だ。
と言うことは、この事件の裏にSWATが絡んでいるというのだろうか？ だとすればあまりにヤバすぎる。

俺一人がウロウロしたところで何の役にも立たないはずだ。
それにSWATは米国警察特殊部隊だ。こんなところで集団惨殺事件など起こす奴らじゃない。

警察...そういえば日本の警察はどうした？ これだけ銃声が鳴り響いているんだ、学校の周りをパトカーで取り囲むぐらいしているはずだろう。

ショットガンを持ったまま急いで窓の外を見てみると、警官ではなく教師が銃を持ってウロウロしていた。

...どういうことだ、警察はまだ動いていないのか？

周りの住民には、この学校から流れてくる銃声が聞こえないのか？

それとも、周りの住民や、警察すら動けないような状態に陥っているとでも言うのだろうか。それはつまり、この地域全ての異常を指す。

それどころか、この学校で起こっているようなことが、他全ての学校で行われているとすれば...？

国全体が、異常な暴走状態に陥っているとすれば？

しかもそれに国際軍事問題が関わっているとすれば.....

考えてもきりが無い。頭の中でいくら考えてもこの状況が変わることはない。
とにかく今はこの学校で生き残ること、それしか考えない方がいい。

俺は外の景色に離別して、教室の天井を睨んだ。

天井の穴までは結構ある。机を積んで背伸びしても、届きそうにない。

机を二つ積みれば届きそうではあるが、そんなバランスの悪い最中に教師と出くわすようなことは避けたい。

一度教室を出て、階段で上階へ上がった方が良さそうだ。

しばらく天井の穴を睨んでいたが、さっきの間抜け野郎の気配は全くない。やはり逃げ去ったのだろう。

「はい、その人、動くなよ。動いたら頭が串団子やで。」

突然、気楽そうな声で俺を脅す男。

どうやら天井に気を取られすぎていたせいで背後の気配に気付かなかっただらしい。

しかし、『串団子』とは何だ？串...細い棒...ボウガンか？

いちいち訳の分からない言い回しをする奴だ。生徒なのか、それとも教師なのか？

「お前も、俺を殺す気なのか？」

静かにそう聞いてみる。

「それはこっちのセリフ。」

意外な答えだった。彼もまた俺を恐れているのだろうか？

「俺は狂った奴以外殺さないつもりだが.....。」

「俺もそうや。...ってゆーか俺は誰も殺す気ないけどな。」

「.....。」

結構長い沈黙。この男は俺を殺す気はないらしい。

「ならば...」と思い、俺は持っていたショットガンを床に落とした。

すると、彼も同じ様に何かを落とした。

俺はゆっくりと振り返り、目の前の男を見た。

黒いバンダナを巻いた少し小柄な男が俺の前に立っている。制服を着ているから教師ではないだろう。

彼の足下には俺の予想どおりのボウガンが落ちていた。そして男が俺に向かって話し掛けてくる

。

「その天井の穴登るには.....一人じゃあ無理やろ。」

その言葉を聞いて、俺は彼と協力する事にした。

「階段から行った方が良さそうだな。どうだ？」

彼は頷く。直後、俺の腹の音が教室に響いた。緊張が解けたせいで、安心したのだろうか。何にしても恥ずかしい腹だ。

「上行く前に、飯か。」

「そうしよう。」

かなりブルーな俺とは正反対に、笑いまくる男。

「俺は田村 龍樹、よろしくなっ。」

「俺は兼田だ。俺のクラスは隣だから、そっちに行こう。」

あまり笑われ続けるのもしゃくなので、俺はショットガンを拾った後、急ぎ足で廊下の方へ歩き出した。

すると後ろで龍樹がボソリと言う。

「隣って、あの死体まみれの？」

「...ああ、苦手なら、廊下で待っていてくれ。食料だけ調達してくる。」

ボウガンを持ち直した龍樹を連れ、そのまま廊下に出て、自分のクラスの前にたった。

「そういえば龍樹。」

小声で話しかける。

「お前がこのクラスの前を通ったとき、人の気配はあったか？」

俺の問いに、龍樹は静かに首を振った。

先刻残してきた五人の生徒は、既に逃げた後ということか。

俺はドアに手をかける。しかし、そこで手を止めた。

——誰かいる。

「どないしたん？」

小声で聞いてくる龍樹。俺は中に人の気配がすることを口パクで龍樹に伝えた。

すると龍樹は、すぐに怪訝な表情を見せる。確かにそうだ。

龍樹が三の五に足を踏み入れてからこの廊下に戻ってくるまで、足音など何一つ聞こえなかった。

ましてやドアを開ける音など尚更の事だ。

しかし確かにこの教室には誰がいる。

この教室の死体は全て確認したので、怪我人が意識を取り戻した、と言うことはあり得ない。もしかして日下部がもう起きたのだろうか？

「少し待っていてくれ。」

言葉を残し、ドアを数ミリ開ける。

ショットガンを置いて、先刻殺した学年主任が持っていた鏡を使って教室内を覗き見た。

人影がひとつ...学生服を着た、かなり細い男だ。

背は高めだが俺ほどではなく、百七十五、ぐらいだろう。

...どうやら日下部ではないらしい。半死人のように、ただポーっと窓の外を眺めている。

位置は教室前方の窓側、死体だらけのこの部屋で、音を立てずに奴に近付くことは困難だ。

ドアにブービートラップが仕掛けられていないことを確認すると、俺はグロックの安全装置を外した。

「動くな、死ぬぞ。」

音を立てずに開けたドアから、銃口だけを男へと向ける。

しかし男はビクリともせず、ただポーっと窓の外を見ているだけだ。

「両手をゆっくりと上げて、その窓にへばり付け。」

どうやら声は届いているらしく、ゆっくりと両手を上げ、窓へベタリと張り付いた。

「お前の名前は？」

聞きながら、足下に注意して近付いていく。相変わらずグロックは男の頭蓋を狙ったままだ。

「佐川 透。」

佐川の背後まで来た俺は、構えたグロックを彼の頭に押しつけ、もう一言、聞く。

「ここで、何をしている？」

しかしその質問の答えを聞く前に、龍樹が小声で俺を呼んだ。

「兼田っ...西側の階段から足音が聞こえる...誰か来よるで。」

...教師か？こんな時に間の悪い。

「足音で、人数が読めるか？」

「...多分、一人やと思う。」

一人か、殺れないことはないだろうが、別に無理して殺る必要もないだろう。

もしその一人が手榴弾を大量に持っていたりすれば、最悪だ。やはりここはやり過ぎそう。

俺はグロックの銃底で佐川の頭蓋の一点を殴打した。

呻き声すら上げることなく、その場に沈む佐川。...しばらくの間、寝ていてもらおう。

「龍樹、教室の中に入ってる。」

しかし俺の声に龍樹は反応しない。聞こえていないのだろうか？

「龍樹、教室に――」

「先生か生徒か確かめた方がええんとちゃうん？」

俺の言葉を遮って龍樹が呟く。

なるほど、確かに生徒かも知れない。

こんな状況でも他生徒のことを心配するとは...。どうやら彼は思ったより冷静なのかもしれない。

「なら教室の中から見た方が安全だろう。」

「あ、それもそーやな。」

俺の言葉にすんなりと賛成する龍樹、そしてすぐにドアから教室に入ってきた。

ついでに俺のショットガンも持ってきてくれたらしい。

教室内は死体だらけだが、この際そうも言ってもらえないだろう。龍樹自信もそれは解っているはずだ。

階段を登る足音が少しずつ大きくなっていく、それにあわせて俺達の鼓動もまた、大きくなっ

ていった。

「いくら生徒だったとしても、気は抜くなよ。」

無言で頷く龍樹。お互い獲物を構えて教室のドアに張り付いている。
何というか、映画のワンシーンでありそうな状況だ。

階段から廊下へ、足音が変わる。
そして廊下から……

「……………」

「……上の階に、行ったな。」

「俺ら、何しとったんやろ？」

龍樹が情けない声で呟く。俺も全く同じ気持ちだった。

「あー、あいつどうするん？」

気分を変えるためか、床で倒れている佐川の方を指さす龍樹。
ついさきほど気絶させた佐川は全く起きる気配がない。

「しばらく起きないから、先に飯を食おう。」

言いながら俺は自分の鞆を探し出して、開けてみた。
今日の朝、コンビニで買ってきた俺のパンは……どこだ？
確かに鞆に入れていたはずだ。
今日は焼きそばパンとカレーパンとアップルパイとベーコンレタスサンドイッチを食おうと思って楽しみにしていたのに…。

俺は鞆を探した。ノートパソコン、筆箱、ルーズリーフ、それだけだ。
俺のパンはどこに消えた？……まさか、あいつらか？

「さっきから何ブツブツゆうとん？」

「詳しい話は後ですが、このクラスには五人の生き残りがいたんだよ。そして俺はその五人に嫌われた。」

かなり簡略化した説明だが、今のところはこれでいいだろう。

「兼田のパンが、そいつらに盗られたってわけ？」

「その危険性がある。」

頼みの綱の葉崎の鞆には、学食で食うための現金しか入っていない。肝心なときに役に立たない奴め。

「なら諦めーや。」

しかし俺は空腹だった。平和ボケしていたところに、いきなり二人もの人間を殺したのだ。半端な疲労じゃない。

「俺は、他に貰うことにする。」

「他って...勝手に食べてもていいんか？」

「どうせ死んでるんだ。腐らせるよりはマシだろう。」

外道な発言だ。しかしここが戦場なら、それは至極当然の行為となる。この非常事態だ、大いに活用させてもらおう。

「本気かよ....。」

龍樹の言葉を無視して床に転がっている鞆をあさり始める。いきなり手作り弁当を発見した。俺はすぐさま弁当の包みを解き、そのふたを開ける。しかし中身を見て、やっぱり他の鞆を探すことにした。

「あれ、食わんの？」

「いや、何か不味そうだしな。」

...嘘だった。中身はかなり旨そうなそばろご飯や漬け物、野菜や魚の切り身などが入っていて、食欲を感じずに入られなかった。

「そこで嬉しそうに食ったったら、俺も軽蔑しとったわ。」

雪崩のように押し寄せてくる罪悪感。

あの弁当が、誰のために作られたのかと思うととてもじゃないが食べることなど出来そうもない。

この教室内に転がっている死体は、この弁当すら食べることが出来なかったのだ。

それぞれに家庭というものがあり、それぞれに家族というものがあり、

この弁当はいつもの様に今日食べられるはずだった。

それが今はどうだ？食べるはずの本人は、どこにいる？

俺は他の鞆をあさり、市販の食料を探してみた。しかしこういう時に限って固形のものはない。なにか見つからない。

もしかしたらあの五人組が持っていったのかもしれない…。

俺は食料の調達を諦めた。この先何が起こるかはわからないが、少なくともここはジャングルやサバンナではない。どこかに閉じ込められたり、監禁されたりさえしなければ、すぐに食料を見つけられるだろう。

龍樹の方を見た。彼は何か飲み物を飲んでいるらしく五百ミリペットボトルが二本、机の上に置いてあった。

俺もそれに習って、他人の鞆をいくつか探し、ペットボトルの水を一本拝借した。

ここは戦場ではない。しかしいつもの安全な場所でもないのだ。

ここで生き残るためにすべきことはなにか。

俺がいつもやってきた軍事作戦のやり方ではなく、この状況に適したやり方へ変えなければいけない。

しばらく時間が経ち、俺と龍樹は互いの今までの話を始めていた。

彼の話によると、『弓道部の朝練で先輩達に後片づけを頼まれたのだが、
かったるいのでサボった挙げ句、飾ってあるボウガンで遊んでいた。
ふと気が付くともうSHRが始まる時間、ヤバイと思い急いで教室に向かおうとしたのだが、
その時に銃声が聞こえた。
続けざまに鳴り続ける銃声にならぬ気配を感じ、遊んでいたボウガンを持ってこの辺りまで来てみた。

しかし銃声は止み、どの教室からも何も聞こえてこない。
仕方なくトイレで一休みしていると、さらにもう一発銃声が聞こえた。
その音を頼りに歩いていたらここにたどり着いた。』
という事らしい。

考えてみると龍樹、好奇心だけで動いている……。
………何て奴だ。

「ここに来るまでに誰にも会わなかったのか？」

俺の問いの後龍樹は少し考え込んだが、それほど時間を置かずに答えを出した。

「人見かけたら速攻、逃げ隠れやで。俺、足には少し自信があるねん。」

『足に自信がある』というのは、『脚線美が美しい』という意味ではなく『足が速い』という事だろう。

「あ。」

間抜けじみた龍樹の声が教室に響いた。俺が「何だ？」という間も与えず話し始める龍樹。

「そう言えば……まだ学年聞いてなかったな。」

確かに忘れていた。が、あまり気にする事でもない気がする。
こんな状況で、互いの年齢など知る意味があるのだろうか。

龍樹は……見た目が若いので一年っぽい。
しかし俺に対して、そう緊張した風でもないので三年かも知れない。

「俺、一年やねんけど、そちらは？」

予想は一気に外れた。こんなにも馴れ馴れしい一年は見たことがない。
しかしまあ、気取った風でもないから不思議と嫌悪感は起きない。
と言うか、葉崎と同じように関西弁なので葉崎と喋っているような錯覚に陥ってしまうのだ。
もしかしたら俺も一年だと思われているのかもしれない……いや、三年の教室を彷徨っている
以上、
普通は三年と思うはずなのだが…。

「俺は…この教室の生徒だぞ。」

「やっぱ三年か。もしかしたら留年とかしてないかなー、とか思ってんけどなあ…。」

残念そうにため息をつく龍樹。本気で言っているのだろうか？

「昔からそうなのか。」

「何が？」

「年上へのタメ口だ。」

「まーな、自分が尊敬しとる人以外には、タメ口やで。」

軍隊では階級制が厳しく、上の者にタメ口など言おうものなら、即刻シゴキの刑にあっていた。
もともと、既に幹部クラスにまで上り詰めてしまった俺は、シゴキの刑とは無関係になってしま
ったが…。
何となく、こういうタメ口が懐かしく思えてしまうのだ。
昔は同階級がウジャウジャといて、下らない話で盛り上がりたりもしたが、幹部ともなると人数
が少ない上、
みんな堅すぎる。はっきり言って窮屈なのだ。

俺が物思いに耽っていると、不意に龍樹がボソリと呟く。
俺に話しているらしかったが、どちらかと言えば独り言に近い声だ。

「…でも、残念やな。君がもし一年やったら、薫の事知っとったかもしれへんのに。」

声からは、酷く辛そうな雰囲気聞き取れる。

『薫』というのは彼の友達だろうか、恋人だろうか？

それとも親しい教師の名だろうか？別に俺には関係の無い事なのだが、何となく気になる。

「あ、俺ちょっと一年の教室に行って来るわ。」

俺に質問をさせる間を与えず、龍樹は立ち上がった。俺は慌ててそれを止める。

「待て、友達を心配する気持ちは分かるが、この状況での単独行動はかなり危険だ。」

俺の忠告を半ば無視するように、龍樹は背を向けて口を開いた。

「大丈夫。俺にはこれがあるしな。」

そう言ってボウガン掲げる龍樹。確かにクロスボウガンは命中率さえあれば確実に人の命を奪える。

だが、それは身を守るためには適していないのだ。

ボウガンというのは一発矢を射れば、次の矢をセットするまで時間がかかる。

敵が複数の時には、矢をセットしている間に瞬殺されてしまうのだ。

しかも彼のボウガンはバーネット社のワイルドキャットⅡ。

性能はまあまあだが、矢を同時に複数撃てるとか、五本の矢をストックしておくことができる、等という機能はない。

とことん对小動物相手用の物だ。そんな物でこの校内を彷徨こうなどと、無謀すぎる。

「そんな物じゃ身を守れない。どうしても一人で行きたいのなら、これを持っていった方がいい。」

俺はポケットの中からグロック17とマガジン全てを取り出した。

そしてそれらの一つずつ龍樹の方へ投げる。どこか不安そうに受け取る龍樹。

「俺にはショットガンがあるから心配するな。」

龍樹は俺の言葉を聞いて「ありがと一な。」と言い残し、教室を出ていった。

静かな校舎内に、廊下を歩く龍樹の足音が聞こえる。そしてすぐに足音が消えてしまった。

どうやら足音を殺し始めたらしい。

「とにかく死ぬなよな。」

俺の小さな言葉が教室の静寂に吸収された。

いくら龍樹の足が速くても囲まれてしまえばそれで終わりだ。

彼に人を殺す勇気がなければ、確実に死ぬだろう。

俺がついていけばそれを防ぐことが出来るかも知れないが、ここは龍樹の意志に任せるべきだ。

彼にとって俺は援護者ではなく、情報提供者だった。...それだけの話だろう。

出会った人間を一人残らず見捨てていく俺も、教師に負けず劣らず外道といえるだろう。

しかし俺がこの騒ぎを止めようとしている以上、隣に素人がいるのは邪魔なのだ。

戦争に子供を抱えていく親などいないように、俺が誰かを連れて行くなど許されることではない。

。

俺は龍樹から佐川へと思考点を変えた。

佐川の方へ歩きながら、彼について考えられるだけの想像を試みる。

まずこの部屋にどうやって入ったか、だ。

俺と龍樹は足音など聞かなかった。そしてドアを開ける音も聞かなかった。

ということは始めからこの教室にいたということか？

しかし彼の制服は汚れていない。

ここで気絶していたのなら必ず血液が衣服に付くはずだ。

というか、佐川なんて名前はこのクラスで聞いたことがない。

となれば、結局外からの侵入者となるがその方法は？目的は？そして何で外を眺めていた？

「おい、佐川。」

バシバシと佐川の頬を叩く。銃で脅されたり、気絶させられたり、頬を叩かれたり...こいつも散々だな。

「さっさと起きろ、佐川。」

さらに強く叩き、肩も揺する。これで起きなければ更にしばらく待つしかない。

「うん.....あれ、えっと...」

やっと起きたらしい。俺はすぐさまショットガンを構えて、佐川の頭蓋へと狙いを定める。

「起きたか。いきなりで悪いが、ここへはどうやって入った？」

目が覚めていきなり銃で脅される、というのも可哀想な気がするが、信用のおけない相手に隙を見せる余裕はない。佐川の表情がすぐさま恐怖へと変化する。

「え、ちょっと...、あの」

「聞かれたことだけに答えろ。」

絶句する佐川。こいつは敵か、一般生徒か？

「えと、そのドアから入りました。」

いいながら教室の前の方のドアを指す。日下部が入ってきた、あのドアだ。

「音もなく、開けたと？」

「開いてたんです、始めから。」

どうも信憑性が薄い。

しかしあの五人の生き残りが前のドアを開けっ放しにしていった、と考えればつじつまは合う。そのドアから入った佐川が静かにドアを閉めれば、龍樹に見付かることもない。

「何故ここに来た？」

「音がしたから、何だろうと思って。」

平然と答える佐川。銃口を向けられて、怖くないのだろうか？

「...何を見ていた？」

「外の人たちです。」

それにしてもあまりにもポーっとし過ぎじゃないか？

あんなもの、サッと見ればそれですむ。周りの音が聞こえないほど外の連中に見入っていたわけでもないだろう。

しかし俺はあえて追求することはせず、次の質問に移った。

「ここに来る前はどこにいた？」

「...職員室です。」

職員室？ どういうことだ、教師達は職員室から出撃したのではないのか？
それともこいつが教師に気に入られていたとか、はたまた職員室に隠れていたとか、
それどころかこいつが校長をそそのかしてこの騒ぎを起こしたとか？
...まあそれは行き過ぎとしても、何故こいつは職員室にいたんだ？

「教師はいなかったのか？」

今まで機械的に答えてきたはずの佐川が、急に声のトーンを落とし始める。ここからが重要そうだ。

「いました。変な人ばかりでしたけど...」

「...けど？」

「中には銃を持っていたり、軍服を着ていた人もいました。」

...やはりどこかの軍人が関わっているのか？
主犯格を校長と仮定すれば、校長がその軍人達を呼び軍人達が銃や麻薬を仕入れてきた.....ということになる。
しかし他国の軍隊がそのまま日本に来ることなどまずあり得ないから、軍を退役した人間と考えた方がいいだろう。SWATにしてもSEALにしても、侮ると命取りだ。たとえ数が少なくても、人の動かし方というものを心得ている。

「お前はどのようにしていた？」

「朝からテニス部の先生と話をしていたんです。一通り話が終わったら、その後は一人でした。」

気になる点が多々あるが、それは後でまとめて聞いてみよう。

「その間、何をやっていた？」

「話が終わって教室に戻ると、誰もいなくて、それからピストルの音が聞こえて、ここに来ま

した。」

こいつも龍樹と同じように銃声に呼ばれたらしい。

しかし妙なのは、何故ここにしか来ないのか、ということ。他の教室では銃撃戦は行われなかったのか？

佐川のクラスにしても、三の五と同じように人間が消えていた、と言う。

俺達のクラスだけが特別なのだろうか。

だとすれば他のクラスはどうやって狩られたというのだろうか

。もしかして他のクラスは全て、まともな教師によって逃がされているのではないか。

俺のクラスのみが運悪く狂った日下部にあたってしまった.....ということなのだろうか？

だとすれば、とても運の悪い話だ。

「一応、持ち物を調べさせてもらう。」

龍樹に関しては『殺そうと思えば殺せた俺を殺さなかった』事から、特に尋問しなくても信用することが出来るが、

こいつの場合は違う。

少し疑い過ぎのような気もするが、念には念を入れておかないと、後で寝首をかかれでもしたら

、
死んでも死にきれない。

片手でショットガンを操りながら佐川の衣服を調べ始める。

ハンカチ、ティッシュ、懐中時計に...フロッピーディスク（FD）？ そして生徒手帳が.....
二つ？

...何故生徒手帳が二つもあるんだ？ どこかに落ちていたのを拾ったのだろうか。

それにこのFDには、ラベルも何も貼っていない。

とりあえず二つの生徒手帳を見比べてみると、ひとつはやはり佐川のもので、
もう一つは『森内悟』という男のものだった。

「佐川、このもう一つの生徒手帳は？」

「朝来たときに拾いました。」

中を見てみると、特に書き込まれていることは何もない。

二年五組で誕生日が三月十二日、その程度のことが顔写真と共に記入してあるだけだ。

「こいつとは、知り合いか？」

少し間があった。本当に少しだけだったが、今までの反応速度と若干差がある。神経が過敏になりすぎているだけかも知れないが、そう感じた。

「違います、拾ったので職員室に届けようと思ったんです。」

「そこでテニス部の教師と会った？」

「はい、でもその先生は『そんな物放っておけ』って言って...。」

やはり即答する佐川。こいつに恐怖という物は存在しないのか？この教室中の死体を見て、圧倒的な恐怖に精神を飛ばされてしまったのだろうか...。しかしそれにしても今の状態があまりに冷静すぎる。聞かれたことにはちゃんと答えるし、記憶も失ってはいない。ただ恐怖という感情が欠如しているだけだ。いや、欠如しているわけではなく、その感情を表に出していないだけなのかも知れない。

「...このFDは？」

「テニス部の先生に渡された物です。中のデータはテニス部員のスコア表、動きの特徴、他校との対戦成績などです。」

こいつはテニス部なのか。しかし、あらかじめ予想していたかのように素速く正確に対応し、ここまでハキハキ言われるとかなり怪しいな。

「悪いが、今調べさせてもらう。」

「パソコン、あるんですか？」

ある。授業のノートはノートパソコンで取っているから、鞆にはいつもカスタムノート（自作ノートパソコン）が入っているのだ。

相変わらず佐川に銃口を向けたまま自分の鞆を探る。自分でもかなり器用なことをやっていると思う。

パソコンを開き、電源が入る。OS起動までの時間が惜しいので、DOS上で調べることにした。

カシャカシャとコマンドを打ち込み、F Dの中身を確認する。

...三つのファイルがあった。一つ目の拡張子は『DOC』。

マイクロソフト・ワードの拡張子だ。テニス部のデータはこれだろう。

D O S上でワードを起動させ、中身にザッと目を通してみる。...どれもこれもテニスのことばかりだ。

確かにテニス部のデータで間違いないだろう。

二つ目のデータを調べてみる。

拡張子は...無い。どういうことだ？

普通、どんなファイルにも拡張子はあるはずだ。なければWindowsで認識するはずがない。

最後のファイルも調べてみるが、やはり拡張子が表示されない。...もしやこれは拡張子暗号型の『BLANK KEY』（拡張子を暗号化し、O S上で空白表示させる方法。ある国の軍隊では、これを使用したソフトを使って新兵器の設計をしたりしている。）か？だとすれば、何故使用する必要がある？

俺はトリガーに指をかけながら、佐川を睨む。

「おい佐川、この二つのファイルは何だ？」

「二つ？そのフロッピーにはテニス部のデータしか入っていないはずですよ。」

そうか、B L A N K K E YによってO S上では認識されず、佐川にはこのファイルの存在すら分からなかった訳か。

となればこのF Dを持っていたテニス部の教師というのが気にかかる。

「テニス部の教師はお前と別れるとき、何か武器を持っていたか？」

「武器かは解りませんが、コップぐらいの大きさの筒を持っていましたよ。...あと、ガスマスクみたいな物も。」

ガスマスク？となると、その『筒』は毒ガスか？

いや待て、三の五を例にとってみると、『教室には何の痕跡もなかった』から、毒ガスというわけではないだろう。

毒ガスなら、床に血を吐いた跡や机を掻きむしった跡などが残っているはずだ。となると、催眠ガスか？

コップぐらいの大きさの筒なら『S L Y』という催眠ガスが軍用化されていたはずだ。

あれを教師が持っていたと言うことか。

つまり、俺のクラス以外の生徒は『S L Y』によって無力化され、どこかに監禁されたか、まとめて殺された、ということになる。

しかしそう考えるとおかしいことが大量に湧き出てくる。

何で俺のクラスだけ、いちいち日下部に殺されたんだ？

そして俺達が狩られている間の短い時間に、眠っている生徒を全員動かすことなど出来るのか？

そしてもう一つ、生徒全員を眠らせるなら、何故校長は放送を行ったのか？

考えれば考えるほどやっかいになってくる。

しかし今色々考えたところでB L A N K K E Yが解読できるはずもない。

まずはこのF Dの解析が先か。

...とは言っても俺のノートパソコンで暗号解読は出来ない。

この学校のパソコンでも使わない限り、何時間もかかる羽目になる。

「今から、情報室に行くが、お前は どうする？」

「...あの、僕の疑いは晴れたんですか？」

言いながら上げている両腕を下ろす佐川。そう言えば忘れていた。しかしもう佐川を疑う理由など無いだろう。

ちょくちょく妙な点もあるが、ただの考え過ぎと判断して良さそうだ。

「済まなかったな、俺の考え過ぎだった。」

すると佐川は、今までの無表情な顔を忘れたかのようになごやかに笑い始めた。

どうやら恐怖で表情が凍り付いていただけらしい。俺の人間不信も、ここまできると異常かも知れない。

少しやつれてはいるが、それでも明るい表情をしている佐川を見ると、自分のした行為が情けなくなってくる。

何も知らない一般生徒に銃を向けて脅すなど、玄人のすることではない。

やはり俺もまだまだだ、ということだろう。

「...どうしてそんなに人が信用できないんですか？」

不意に佐川が口を開いた。今の俺にズキッとくる言葉だ。

「まあ...死にたくないから、だな。」

俺はどこかで聞いた傭兵の言葉をそのまま口に出した。
俺の純粋な意見とは違うが、一般人である佐川に対しては、この程度の反応で十分だろう。

「かなり自己中心的ですね。」

「死にたくないからな。」

俺はそうとしか答えられない。
戦場ではまず自分の命を第一に考えないと生き残ることが出来ないからだ。
だがそれは個人作戦遂行時のみの場合で、軍隊ではそうはいかない。
軍隊ではチームワークが第一となるので自分の事だけ考えていては同じ隊の者に迷惑がかかってしまう。
これが迷惑程度の話で済めばいいが、実際の所そこまで現実は甘くはない。
大げさに言うところだ。

『軍隊での自分勝手な行動は作戦の失敗を意味する。作戦に失敗すると、
隊は戦場から撤退しなければならないが、戦場から撤退するという事は敵に背を向けるという事だ。
たとえ援護射撃があったとしても敵の的になるのは確実。軍隊は大勢の死者を出すだろうし、
戦死した軍人の家族も心を痛める。しかし更に被害はまだ続くのだ。
作戦が失敗したという事は救うべき国を救えなかったという事。作戦失敗により、
その国の人々の生活は更に悪化する。何千、何万、何十万という数の人々が苦しみ。悲しむ事になる』

つまり...たった一人の行動がその何十万倍の人間を苦しめる結果になってしまうという事だ。
俺も実際ロシアで軍事訓練をした時に、スタンドプレーによってチームの足を引っ張ったことがある。
と言うか俺の機動力がケタ外れだったらしく、チームの連中がいきなりバテてしまったのだ。
その後の俺にはハンデ付きの訓練が用意されたのは言うまでもない。
まあそのおかげで幹部にウケが良かったわけだが。

俺が思い出に耽っていると、佐川が疲れた表情で俺のノートパソコンを触り始めた。

「どうした？」

「...いえ、二つのファイルって、何のことだろうって思って。」

佐川に説明するのを忘れていた。しかし説明したところで何が変わるわけでもないだろう。俺は適当にかいつまんだ説明をしてやった。

「お前の言っていた教師が、この生徒狩りに一役買っているかも知れない、ということだ。」

途端に暗い表情になる佐川。先ほどの疲れた表情より、更に落ち込みレベルが向上している。

「狩られ...たんですか？ここの人達。」

日下部という教師に、お前達とは違う方法で狩られた...と言うことを説明してみたが、佐川は半信半疑でその事実を受け取った。

やはり現実味がないのだろう。佐川は生徒達の不在を『臨時の集会』と考えていたらしい。ある意味そうかも知れないな、『臨時の監禁集会』...最悪だ。

「何で先生がそんなことを...」

「さあな、それを今から調べに行こうとしている。」

しばらく物思いに耽る佐川。俺の冷たい一言に対し、反感を抱いているのだろうか。

「...ついていってもいいですか？」

どうやら俺への不信感ではないらしい。しかし佐川を連れて行くとなると、多少なりとも機動力が落ちるな。

「危険を承知でついてくるならいい。しかし五メートル後ろだ、でないと安全の保証は出来ない...と言うか邪魔だ。」

「はい、五メートル後ろですね。」

俺は「ついでに足音も消せ」と付け加えた後、パソコンをおいてショットガンを構え、教室を後にした。

前に出たときと同様に、廊下は静まっていた。
佐川のためにドアは閉めずに廊下へ出て、静かに情報室の方向へ進み始める。
情報室は別棟三階西側。
距離はそう遠くないが、教師に気を付けて行動するとなると話は別だ。
多分今、俺のクラスの生き残りを狩り取るために、多数の狂った教師が校内を徘徊しているハズだ。
そいつらとの接触を極力避けて行動しなければならない。

俺は足音を殺して廊下を走り、そのまま渡り廊下まで進んだ。
近くに教師の気配はない。
恐ろしいほど静かだ。どの教室からも何も聞こえず、さながら夜中の後者を連想させる。
見晴らしの良い（つまりは発見される危険性の高い）渡り廊下を音もなく走り抜け、別棟へと進侵入する。
この棟にクラス用の教室はないから教師が徘徊していることはないだろう。
...いや、俺のクラスの生き残りを捜すため、この棟に来ている教師もいるかも知れない。
気を抜くことは許されない、訳か。
まるでひと気を感じさせない廊下を、静かに、慎重に、走る。
俺の所属しているロシア軍特殊部隊『スペツナズ』の十八番だ。
体勢を低くして膝のバネを最大限に利用する走り方。
これをマスターするのに何年もかかるらしいが、俺は1年半死に物狂いで訓練して、スピード修得した。
足場の悪いところでは不可能だが、こういう障害のないところではかなり利用できるので、暗殺任務などの時には大いに活用している。

目的の情報室に着くと、俺はひとつ息をついた。
廊下はもちろん、情報室からも物音は聞こえない。別棟もまた、静寂に包まれていた。
聞こえると言えば自分の鼓動のみ。他に誰の吐息も聞こえない。
...誰も？ そう言えば佐川はどうした？ 俺の後をついてくると言っていたが...
佐川のことなどそっちのけで走ってきた俺が佐川のスピードを考えていたはずがない。
佐川はただの一般生徒なのだ。軍人についてこれるはずがないだろう。

結論...佐川を落としてきてしまったらしい。
しかし職員室の前にある落とし物箱にも入ってそうにないので、もう放っておこう。
可哀想な気もするが、俺についてきて死ぬだけだ。
これを機に自分で逃げてくれる方が都合がいいかも知れない。

俺は佐川のことを諦めて、情報室の窓を覗いてみた。

しかしガラスの奥には黒いカーテンが掛かっていて、中の様子は全然見えない。

ふと、微かな希望を胸に、後ろをふと振り返ってみても、やっぱり佐川はいなかった。まあ...そんな都合のいい話もないか。

「そう言えば佐川って...」

少し呟く。だがそこから後は俺の心の中で呟く事にした。

佐川が三の四に入ったとき、俺は三の五にいた。

龍樹が来る前に三の四に入っていたと言うことは、俺が放った三の五での銃声も聞いていたはずだ。

なのにあいつは何も言っていなかった。

忘れていた、と考えればそれで済むが、何となく気になる。ついでに佐川が何故職員室で保護されていたのか。

これも佐川が気に入られているからだ、と考えれば済むことだ。

しかしやはり気になってしまう。何より佐川のあの落ち着きぶり。

先刻は恐怖のためと納得したが、本当の理由を佐川本人から聞いていなかった...

今頃になって佐川への疑惑がウジャウジャ膨らんでくる。

だがそんな事を今考えていてもしょうがない。

俺は後悔にも似た感情を押し殺して、情報室の窓を数ミリ開けてみた。

鍵が閉まっているわけではなさそうだ。そしてブービートラップの類も見当たらない。

こんな時、スタングレネードを持っていたら教室内の相手が誰であろうと無力化できるのに...

。

しかし無い物を欲しがっても事態は好転しない。

俺は少し考えてみることにした。

このまま静かにこの窓から侵入しても今はまだ夕方、廊下の光が中に入ってしまう。

もし中に教師が潜んでいれば、その光を頼りに銃撃を始め、俺は蜂の巣となってしまうだろう。それならどうするべきか。

...同じ教師を装って声をかける？

...彼らの合い言葉すら知らない俺がそんなことをしても、やはり蜂の巣になるだけだ。

...佐川を待って、二人同時に侵入して教師を攪乱させる？

...しかし教師が二人いればやはり蜂の巣。

...ここはこちらの存在をあらかじめ知らせ、相手の思考を掻き乱すしかないだろう。

俺はショットガンを構え、情報室から少し離れた位置からトリガーを引いた。

やかましいショットガンの銃声が校舎中に鳴り響く。
この音を聞きつけて教師が来ることになっても、障害物の少ないこの廊下ならいくら対処できそうさ。
両側から挟まれればそれは好都合。両側から発砲して互いに殺し合ってくれれば言うことナシだ。
その程度の弾道は読める。もし相手がショットガンを持っていれば、窓の外に逃げればいい。幸いこの別棟校舎の壁には、雨落としのパイプが沿っている。それに捕まって階下へ逃げればいい。

散弾を撃ち込まれ、薄い氷の様に脆く砕けていく窓ガラス。
ガシャガシャと破片を落とし、うるさいことこの上ない。
黒いカーテンは弾に貫かれ、その穴から光を吸い込んでいく。
俺はもう一発別の窓に打ち込んだ。やはりやかましく砕け散る窓。
更にもう一枚ガラスを割る。カーテンは穴だらけになり、ポロポロだ。

これだけやかましく騒いでいるのに、校舎には誰の足音も響かない。
誰一人この廊下に現れる気配がない。...この校舎には、誰もいないのだろうか？
グシャグシャに破壊された情報室の前で、俺はしばらく待ってみた。
しかし情報室の中からも廊下の奥からも、物音らしい音は聞こえない。

「いや、違うな...一人、いる。」

ボソリと呟き、情報室に耳を傾けた。
声の高さからして女の泣き声だろうか。
...生徒か？だとすれば俺のクラスの生き残りだろうか？
...それともこれは俺を油断させるための、教師の芝居なのだろうか...

しばらく聞き続けてみる。もちろん廊下からの襲撃にも備えている。
声を必死に殺しながら、泣き続ける女。これは教師か一般生徒か？
深く考え過ぎなのかも知れない...。
どんな映画であってもこういう場面で女を見捨てる主人公はいなかった。
しかしそれは映画の中の話だ、あくまで作られた世界での話。
現実では全ての事を自分第一に考えなければならない。全ては慎重に。
...そうしなければ、殺られる。

暗くなってきた廊下から、闇の支配する室内へ目をやった。カーテンの穴を塞がないよう、中を覗く。
中へ漏れる光を遮った場合、それによって相手に位置が知られるからだ。

室内には、やはり女の気配しかない。呼吸も、女のそれだけだ。

「泣いている女、死にたくないなら窓から顔を出せ。」

壁越しにそう言って、俺はその場から離れた。
情報室の窓が見えるよう、距離を置いて廊下の奥へと足を運ぶ。

「お前が一般生徒なら殺しはしない。二十秒以内に顔を出せ。」

二十秒のカウントダウンを始め、窓に向けてショットガンを構えた。
もし相手が生徒でなかった場合、こちらに向けて発砲するおそれがあるからだ。
ただの一般生徒なら、後でなだめればいいだけのこと。
しかしたとえ一般生徒であっても、教師側に寝返った生徒である可能性もある。
そうなるとやっかいだが、とりあえず今は顔を出させよう。
考えるのはその後だ。既に九秒たっている。

「あと十一秒以内に出てこなかったら、一般生徒であろうと容赦せずに室内を乱射する。
これは散弾銃だ。跳弾も含めれば確実に死ぬるだろう。」

そうやって脅してみると、すぐに足音が聞こえてきた。
暗いせいか、途中の障害物にぶつかりながら走ってくる女。
聞こえてくる音が思考の映像をより鮮明にする。

そして黒いカーテンの開く音がした。顔を出したのはやはり女。
よほど急いでいたのか、肩まで乗り出している。
そのお陰で女が制服を着ていることは解ったが、いくら砕けているとはいえ窓を開けずに乗り出すのは危ない。
下手をすれば窓の隅に残っているガラスが首めがけて落下することもあるのだ。

「まず窓を開けてから、顔だけ出せ。」

急いで顔を引っ込め、窓を開ける女生徒。
そして再び顔を乗り出すと、声のしたであろうこちらへと視線を向ける。
その先にはショットガンを構えている俺がスタンバイしている。

「ヒィイツッ！」

短い叫び声を上げて、また顔を引っ込めてしまった。
勢い余って室内で転んでしまったらしく、ガタガタという音が聞こえた。

「撃ちはしない。とりあえず顔を見せろ。」

「...助けて、殺さないで...ください。」

ガタガタと震えた声で命乞いを続ける女生徒。
予想していた一般生徒の反応ではあるが、敵だという可能性もまだまだある。

「殺されたくなければ、顔を出せ。」

俺に言われて、恐る恐る顔を出す女。その顔は涙でグシャグシャだ。
もとはかなりかわいいのであろう、セミロングの女生徒はその泣きはらした顔でこちらを覗き込んだ。

「あれ...？」

何を思ったのか、目を擦りながら、こちらに話しかけてくる女生徒。
少しすると「あの、きみ...兼田くん...？」などと言いだした。どうやら俺の事を知っているらしい。
一瞬それだけで安心しようとしたが、名前ぐらいなら教師が知っていてもおかしくはない事に気付いた。
こいつが教師の差し金という危険性もある。ここで気を抜いてはいけない。

「訊いてどうする？」

冷たくそう言い捨てる。
だがこの女の声と顔、少し覚えがある気がする。
...一般生徒で俺のことをよく知っている奴...そんな奴いただろうか？

「やっぱり、兼田君でしょ？」

この馴れ馴れしさ、やはり聞き覚えがある。確か去年のクラスの文化委員.....

「憶えてないかなあ？神奈詩 千里って。」

かなうたちさと...そうだ、神奈詩だ。変な苗字の文化委員だ。
苗字が変だから記憶に残っていた奴だ。
それ以外は全く印象に残っていないが.....とりあえず親しげに話してきたことだけは覚えている。

「お前...神奈詩か」

言いながらショットガンを下ろす。すると神奈詩が小さく声を漏らし、その場にもたれかかった。
どうやら安心したらしい。

「...よかったあ...酷い...よ、兼田くん。何なの、あれ.....」

声が震えている。よほど怖がっていたのか。

「済まなかった、大丈夫か？」

謝罪混じりに近付いていき、神奈詩の側まで来る。
すると神奈詩は俺の学生服を掴み叫び始めた。

「大丈夫なわけ...ないじゃない！——なんで...うくっ...こわがらせ...」

語尾が濁る。
言葉が詰まる。
叫んでいたはずの勢いが、急激に嗚咽へと変わっていく。
制服を掴んでいたその手が力を失って、ゆっくりと下ろされていった。

そこで俺はやっと気がついた。
神奈詩は、怖ければ泣いてしまう、普通の女の子なのだ。
俺が今日見てきた一般生徒とは違う、しかし今日の惨劇から逃げてきた女の子なのだ。
情報室に隠れていたということは、何らかの理由で教師の手を逃れ、今まで逃げ延びてきたという事。
それまでに、どこかで誰かの死体を見てきたのかも知れないし、どこかで誰かに殺されかけたのかも知れない。
そんな絶望的なこの状況で、俺を怖がらないはずがないのだ。
明らかに怖がっている神奈詩を前に、俺は冷たく脅し、ショットガンを向けた。
そして「殺す」という言葉を、何度も吐いたのだ。

「...くう...っ...怖...いのに...何でっ...——酷い、よ。...」

必死に喋ろうとはするものの、言葉になりはしない。
鳴き声がただ静かな廊下に響く。俺はショットガンを置き、窓を飛び越えて神奈詩の側に寄った。

こみ上げる罪悪感。あまり話した事のない相手だけに、どう謝ればいいのか分からない。
いくらこんな状況とはいえ一般生徒かも知れない人間に、あれほど冷たく接するのはまずかった。
佐川の時と同じ...また何の罪もない人を疑って.....そしてその心を傷つけた。

「俺が...悪かった.....。」

その言葉を吐いたとき、自分がただの人間であることを実感した。
いくら小さい頃から軍事訓練をしていても、この成長しきっていない心は恐怖を感じるし、
その恐怖に対して圧倒的な力で対抗しようと藻掻く。
そしてどれだけ異常な殺戮を見ても、戦場に慣れることはできない。

自分は周りより優れた能力を持っていると思っても、実際誰も助ける事なんてできなかった。
助けるどころか、逆に強すぎる警戒心によって他人を恐怖に陥れるだけだ。
なまじ中途半端な力はタチが悪い。

俺は、恐怖による疑心暗鬼にとらわれていた。
しかしその事実で失望するわけでもなく、『疑うという行為』が自分の命を守るものだと決めつけてきたのだ。

...確かにそれで自分の命は守れるかも知れない。
でも他人の命はどうだ？俺はクラスメイト五人を、『自分は教師と戦うから』という理由だけで跳ね除けた。
龍樹は『薫を探しに行く』と言ったから、一人で行かせた。
佐川は『邪魔だから』捨ててきた。

俺は『危険に向かう』という理由のもとに、人を守る行為から逃げてきたのだ。

何が軍人だ、何が特殊部隊だ、何が幹部クラスなんだ。言い訳の上手い政治家と同じじゃないか。

「済まない、神奈詩。」

消え入りそうな声でそう呟く。

神奈詩は相変わらず泣き続けるばかりだ。

出来れば俺も泣き出したい。自分の無力さに、ただ泣きわめいていたい。...でもそんなことは許されないのだ。

俺は神奈詩に恐怖を与えてしまった。

ならば俺はその恐怖を取り除いてやらなければいけない。それが俺の、今の役目だ。

「神奈詩、とりあえず部屋の奥へ行くぞ。ここでは教師に見つかる。」

もう少し歯の浮くようなセリフが吐いてみたいものだ。

そうすれば少しは空気が和むかも知れないのに。

暗い室内に目を慣らしながら、俺は闇へと足を踏み入れた。

「.....っ...っ.....う。」

言葉を発することも出来ず、泣きながら俺の言うことに従う神奈詩。

闇の中で俺が出来ることは、神奈詩を教室の奥へ案内することだけだ。

「かなうー」

言おうとしたところで俺は言葉を止める。神奈詩が泣き顔ながら、キョトンとこちらを覗く。

「誰か来る。」

泣き顔がまた恐怖に引きつった。

「大丈夫だ、教師じゃないかも知れないだろう？」

声すら出せずに怖がる神奈詩を、精一杯の言葉で元気付けてみる。

しかしその言葉は嘘だらけだ。

廊下に響く微かな足音には、確かな金属音が混じっていた。

あれはマガジンがぶつかる音だ。

この足音の主は、銃を携帯していて大量のマガジンを持っている。

そんな奴がいるとすれば、教師以外に有り得ないだろう。

「俺が見てくる、ここで隠れてろ。」

必死に泣き止もうとしている神奈詩を机の下に隠れさせ、俺はそのまま穴だらけのカーテンに近付いていく。

途中、机の上に置いてあるFDの束をつかみ取り、その枚数を数えてみた。...十枚。

廊下の足音が次第に大きくなっていく。

そういえばショットガンを廊下に置いてきたままだった。

これは非常にヤバい。

窓が全て破壊されていて、カーテンは穴だらけ。

おまけにショットガンまで立て掛けてあるとなれば、どんな馬鹿でも見過ごすはずがないだろう。

...そして今の俺に武器はない。銃VSFDなど、勝負するまでもないだろう。

しかし諦めるわけにもいかない。

俺は入ってきた窓ガラスの方へ歩き、壁（カーテン）を背にして足音の主を待った。

次第に近付いてくる足音。高まる緊張。

立て掛けてあるショットガンに気付いたのか、その間隔が短くなった。ガチャガチャと喧しく歩いてくる。

このタイミングを逃せば命の保証がない。幸い、穴だらけのカーテンのお陰で敵の位置を確認することが出来た。

そして敵がショットガンの手前ぐらい（つまり俺の真後ろ）に来た所で俺はFD9枚をまとめて投げる。

...方向は、教室の後方右隅。

すかさずもう一枚投げる。

一瞬待って、九枚のFDの音と共に窓を飛び出し、敵の影を視界に入れた。

予想通り敵はFDの音に反応して、こちらに気付くのが遅れていた。

あとに続くもう一枚の音にも律儀に反応してくれる。

カーテンを舞わせて、飛び膝蹴りを目標の眉間にぶち込んだ。

不意打ちに成功したらしい。そいつは万歳したような体制で派手に廊下に倒れ込んだ。

廊下は夕日に染まっていて、紅い。

ずっと暗闇にいた俺の目はその夕陽に痛いほど焼かれた。

しかしここで止まってはダメだ。

敵が近接戦闘範囲内にいる以上、攻撃を続けなければ殺られる。

そいつが倒れたであろう場所へ蹴り繰り出す。

短く悲鳴が聞こえた。手応えもあった。

だがあまりダメージは多くなさそうだ。

試しに少し目を開けてみる。

一瞬だけそいつの位置を確認した時、俺には幻覚が見えた。

蹲っているのが、龍樹に見えたのだ。

しかし龍樹であるはずはない。
彼なら足音など立てないだろうし、マガジンをガシャガシャいわせることもしない。
ここを調べるにしても、もっと手際よく調べるはずだ。

しかし、見えないからと言って信じないわけにもいかない。
もし龍樹だとすれば、また俺は罪もない生徒を追い詰めることになるのだ。
もうあんな辛い思いはしたくない。...せめて、一瞬でいいから確認したい。
俺の動きは鈍くなった。すぐに俺は何か堅いもので頭蓋を殴られた。

「ぐうっっ！」

走る激痛、止まる思考、痺れる身体。
しかし確かめるべきは相手の正体だ。
俺は必死に目を開こうとした。しかし頭に食らった一撃のせいか、視点が定まらない。

「うぶぐっ！」

今度は腹に入れられた。途端に咳き込む。
間髪入れずにまた頭に衝撃。たまらず意識を失いそうになる。
...やばい、このままじゃ確実に殺られてしまう。
せめて相手さえ確認できれば...

「ナメやがって、死にやがれ！」

龍樹の声ではない、クラスメイトの声でもない、葉崎の声でもない、佐川の声でもない、神奈詩の声でもない。

目は見えずとも、気配でその位置を察し、殴り込む。
どこに当たったかは解らない。だが手応えがある。
まだよく見えていない相手の服を掴み、頭と思われる場所に頭突きを食らわせ、膝を入れる。
途中、銃がガシャリと落ちるような音も聞こえたが、かまわず蹴り続けた。

...ようやく視力がもどり、相手の顔がわかった。
動かなくなったそいつを見てみると、どこかの兵士らしかった。
。戦闘服を着て、律儀に階級章など付けている。
...俺の覚えている範囲外の軍服と言うことは、新種かマイナーか、そのどちらかだ。
俺は仰向けに倒れ込んだそいつの首を踏みつけ、装備品を全て剥ぎ取った。
後はこいつの服で体を縛っておけばいいだろう。

「神奈詩、ちょっと手伝ってくれ。」

俺は神奈詩を呼んだ。

闇の中から「終わったの？」と言う小さな声が聞こえた。

恐怖に怯えていて、声が震えている。

「終わった。けどこいつをしまっておかなければ、また誰かに見つかる。」

言いながら俺は、どこの軍とも解らない人間を担いだ。

こちらへ歩いてくる神奈詩とすれ違う時に「落ちてる物を、頼む。」と伝えて、そのまま情報室の闇の中へと入っていった。

俺が男を運び終わると同時に、神奈詩がショットガンと装備品を持って帰ってきた。とりあえず礼を言おうとすると、不意に室内の明かりがつき始める。神奈詩がスイッチを探り当てたらしい。

「何考えてる！すぐ消せ！」

「...え？」

「『え？』じゃない！すぐに電気を消せ！」

俺は両肩の荷物（人間）を壁際に投げ捨て、急いで開いている壁際の暗幕を閉めにかかった。その間反応の遅れた神奈詩が慌てながら明かりを消す。

「ちょ...ちょっと.....何？何で？」

不機嫌そうに錯乱する神奈詩。その時既に俺は暗幕を全て閉め終えていた。

一息ついて神奈詩に向き直る。

部屋が真っ暗なので実際神奈詩の方を向いているかは定かではない。が、気にせず闇に向かって声を掛ける。

「パソコンの明かりで、我慢してくれ。」

そして俺は手近にあるパソコンを起動させた。

「ごめん...また変な奴に見つかったらヤバイもんね。」

ポツリと謝る神奈詩。どうやら今がどんな時なのかは解っているらしい。

解っているのならそれで十分だ。

「別に...一瞬だったから大丈夫だろう。気にするな。」

「.....」

自分なりに反省しているのか、そのまま何も喋らない神奈詩。

俺も喋らない。と、言うか喋れない。かなり重苦しい空気が流れている。...何故だ？

言葉が悪かったのだろうか、俺としては励ましているつもりなのだが。

...やはり俺は人の心を単純なものと思い込んでしまっているらしい。

だが黙り込んでいても事態は回復しない。

一刻も早くこの騒ぎにケリを付けなければ...死体が増える一方だ。

俺は腰を下ろして壁際に捨ててある男の持ち物を調べ始めた。

暗くてよく解らないが、パソコンのOSが起動すると共にディスプレイの周りが明るくなり、そのお陰で何とか調べることが出来そうだった。

男の装備品を点検していると、おかしい事に気付いた。
この男.....重装備の割にウエポンが少ない。
M16のマガジンを持っているくせにM16本体を持っていないし、
ベレッタ本体を持っているくせに九ミリの弾は一発もっていない。
サイドアーム（ベレッタ）を持っているだけなら誰かのサポートをしている下っ端と判断できるが、
何故かハンドグレネードだけを異様に持っているのだ...その数なんと八個。
一体何をやる気だったんだこいつは.....

八個のハンドグレネードをごろごろと床に置き、M16用マガジンを制服のポケットに突っ込もうとした時、
不意に足音がした。
その足音は少しずつこちらに近付き、そして俺の真横で止まる。
焦ることはない、神奈詩だ。

腰を下ろしているせいで彼女の表情は分からなかったが、何か言おうとしているのだろう。

「どうした？」

少しの沈黙、そして神奈詩からの返答。

「...その人、死んでるの？」

「いや、肋骨が何本かイカれてるが、死んでない。」

すると神奈詩は泣きそうな声で呟き始めた。

「そこまでする必要、あるの?...痛いんだよ？」

「ここで動き出されて殺されたらたまらない。」

いいながら顔を上げると、神奈詩が絶句した。
多分血だらけの俺の顔にショックを受けたのだろう。

「俺だって痛い。だから死にたくないんだ。」

その俺の言葉に、神奈詩が小さく謝る。

微かに震えた声で、それでも俺に伝わるような不思議な響きを持っていた。

男の持ち物全てを調べてみたが、この騒ぎの核心となるような物は何もなかった。

やはりこいつは小者だった、ということだろう。...ならせめて装備品だけでも活用したい。

...しかしこいつの持っている物で役に立ちそうな物など、手榴弾しかない。

なんと言ってもこいつのベレッタは、空なのだ。

M16の弾は五、五六ミリ弾なので九ミリパラベラムのベレッタに装填できるはずもない。

なんて役に立たない奴なんだろう。

結局俺は、メインウエポンがショットガンのまま、サイドアームに至っては手榴弾、
と言う情けない装備でこれから生き抜くこととなった。

そうして準備を進めていると、神奈詩が不意に呟いた。

「ねえ、逃げようよ。」

逃げてどうする、このまま教師達を放っておくのか？

——いや、待て...『逃げる』？

そう言えば何故俺は逃げないんだ？

いくら教師が異常だからと言って、俺が裁く必要などどこにもない。

日本の警察特殊急襲部隊SATや、特殊班に任せの方が確実に効率がいいだろう。

いくら今警察が動いていないと言っても、俺と神奈詩がここから逃げたして通報すればいいだけの話だ。

もし警察が機能していないような惨劇になっていけば、そのままどこかへ逃げ続ければいい。

警察が動かないなら、自衛隊が動かないならこの騒ぎなど止まるはずもないのだから。

...何と言っても相手は異常者の集団。

その中には元軍人と呼べる者もいて、重火器も大量に所有している。

いくら俺がはしゃごうとも、勝てるはずがないだろう。俺はなぜその事に気付かなかったのだろう？

「こいつ、起こすぞ。」

言いながら男の頭を掴んだ。

「え？...何するつもり？」

少しとぼけたような声を出す神奈詩。俺の言葉が予想外だったらしい。

だが俺の中にはもう『逃げる』という選択肢しかなかった。自分でも都合のいい脳だな、と思う。

「こいつを起こして逃げやすいルートを聞き出すんだ。」

「ええ...? ...ちょっと.....本気？」

心底嫌そうな顔をする神奈詩。やはり男が起きるのは不安なのだろう。

「体中縛ってあるんだ。鞭で叩いても亀より速くは動けないだろう。」

「.....でも...そう簡単に教えてくれるかなあ？」

吐かなければ痛めつけるまでだ。

「何なら...蠟燭でも垂らすか？」

無論質の悪い冗談だ。...が、神奈詩は凍っている。

「...冗談だ。気にするな。」

こいつは言ってやらないと解らないらしい。

まだよく解っていない神奈詩を無視して俺は尋問を始めることにした。

「神奈詩、目を閉じて耳を塞いでろ。」

俺の言葉に神奈詩が怪訝そうな表情を見せる。

「.....やだ。...我慢する。」

駄々をこねる子供の様に意地を張る神奈詩。

そんな神奈詩を見て俺は「無理だ」と確信していた。

拷問はある意味殺人よりもずっと残酷なのだ。

やられる方も、やる方も、そして見ている方も精神的苦痛を伴う。

「その表情だと、とても無理そうなんだが.....」

怒ってはいるが目は潤んでいる神奈詩。
俺がこの男の顔面を殴りつけるだけで「やめてえっ！」と叫んで泣き出しそうだ。
だが本人は耐えられるという自信があるらしい。

「自分で言った事は守れよ。」

「.....守る。」

視線を逸らしながら呟く神奈詩。いきなり自信が無くなってきたらしい。
多分こいつの意志の堅さは豆腐並みだろう。
まあ、泣こうが叫ぼうが（叫ばれるとヤバいが）俺を邪魔することは出来ないだろう。

「ちなみに...声は出すなよ、神奈詩。」

一応、釘は打っておく。神奈詩も一応、頷いた。

その直後、俺は腕を振り上げて男の胸を見る。

（肋骨が内臓に刺さらないようにしなきゃな...）

などと思いながら男の腹へ拳を入れた。
胃液の逆流する音と内臓が悲鳴を上げる音が重なる。
そして...痛みによって叩き起こされた男の叫び声が室内に響き渡る--その前に俺が顔面を殴り、
黙らせた。
目を見開いた男の目には涙.....そして赤い眼光。

「！！」

俺はとっさに男の側から離れ、床を蹴って更に男との距離を伸ばした。
その瞬間に鈍い音と水が床にこぼれる音が聞こえた。
弾丸が頭蓋にめり込む音と血液が飛び散った音だ。
同時に新鮮な血の臭いも鼻腔を突く。

（レーザーサイトにサイレンサーか。方向は教室前ドア付近だろう。何人だ.....）

瞬時に考えていると、急に室内の電気がついた。同時に俺の目が焼かれる。

「神奈詩！伏せて這ってろ！」

俺の声の後、赤い光が俺を追う。やはり声を上げれば目立つようだ。
だがこれで神奈詩への注意も削がれたはず...

前傾姿勢で室内を走り、敵のレーザーサイトを攪乱する。
並んでいる机を蹴り倒し、バリケードを作った。
当然上のパソコンも床へ転落していったが、気にせず相手の様子を伺う。

ドシュッ...っとサイレンサー付きの銃が鳴り、机に弾丸が突き刺さった。
弾が貫通しない所を見ると、この机は意外と硬いらしい。

その後、銃声は鳴らなかった。
ドア付近にいるであろう敵は一発撃った後、無駄と判断して発砲を諦めたのだろう。
赤い光の線が教室中を彷徨っている事を確認すると、俺は相手の銃を観察した。
ベレッタだ。

グリップにレーザーサイトの回路を組み込み、
グリップを握ることによってレーザーが照射されるグリップスイッチを取り付けている。
だから構えている間、ずっとレーザーを照射してしまっているのだ。

ベレッタM92FS。口径九ミリ×十九、全長約二百七ミリ、重量約九百七十五グラム、装弾数約十五発十一発、ベレッタ社製。言わずと知れた拳銃の王道。初期のベレッタは作動不良が多かったが現在のベレッタは信頼性、命中精度、共に良好。米軍で制式採用されていることから、実に多くのユーザーを虜にしている銃。しかしグリップのサイズが大きく、日本人には不向きと言える。

俺がベレッタのことをダラダラ考えていると、不意に神奈詩の声が聞こえた。
その声は明らかに、恐怖を表している。

「...え？.....何...」

思考が中断される。狙われているのは俺ではなかった。
しかし頭に浮かぶ恐怖、の二文字。赤い光線の先。その先には神奈詩がいた。
俺が狙われている訳ではなかったのだ。
だが.....

「あああああっ！！」

俺は叫び、バリケードにしていた机を蹴っていた。

パソコンもろとも机が飛ぶ。

それは前にあるいくつかの机（パソコン含む）をも突き飛ばし、教室の前壁にぶち当たってようやく停止した。

その後もいくつかのパソコンが連鎖を繰り返して転落していく。

机とパソコンの残骸を飛び越え、敵の方へと駆け跳ぶ。

当然室内には、先程の机の大波によって生じた轟音が鳴り響き、止まない。

俺の足音などそれによってかき消され、敵が俺の接近を知ることすらなかった。

（敵は一匹、武装は拳銃、レーザーサイトの扱いが不慣れな事から素人だろう）

そう確認して、レーザーを光らせている人影に飛びかかった。

まずは跳び蹴りを頭蓋に打ち込み、そのまま黒板へ叩きつけた。

崩れる身体にもう一発蹴りを入れて、今だ光線を放っている拳銃を奪い取る。

間髪入れずにトリガーを二回引いた。

そして俺はすぐに振り返り、本能的に前のドアに銃口を向ける。

何となく気配を感じたのだ。言ってみれば戦場の第六感というヤツだろう。

丁度「何事か？」と走ってきた教師を視界に捕らえる事が出来た。

武装していたので構わず2発打ち込む。

声を出す事すら出来ずに倒れる教師。

もしかすると軍人かもしれないが、だとすれば大まぬけだ。

そいつが床に伏す頃には俺はその場から右へ跳躍していた。

これも直感だった。

直後さっき俺がいた場所にアサルトライフルが3連射され、全弾が死体その2にめり込む。

床に広がる血の海...そして偽りの静寂。

敵は動く気配を見せない。

恐らく奴の足下に転がっている死体その3によって迅速なエントリーが出来ないのだろう。

俺がドアにレーザーサイトを向けている以上、迂闊にミラーも出せないはずだ。

そんな状況でどう侵入するか、必死に考えているのだ、あの敵は。

（その考えも無駄に終わる。）

俺はポケットに入れておいた死体その1の手榴弾を取り出した。片手で装置の位置を探り、憶える。

典型的なエッグタイプ、M26A1だ。延期信管は約四秒。

音を立てないようにセフティレバーを押さえながら安全ピンを抜きとる。
そして.....

(..... 1 2 3 ... !)

3秒弱でドアへ投げた。
直後爆音。そして熱風。
死体その4の出来上がりだ。
別に楽しんでいるつもりはない。これが戦場の、いつもの俺だ。
他の気配は感じない。それは確信だった。
何故か今の自分の直感だけなら信じられる気がしたのだ。
...自分しか信じることが出来ない、つまりは人間不信だ。
...しかしだからこそ俺は思う。それが戦場に生きる者の性質なのだと。

神奈詩が息を呑む音が聞こえる...多分俺に恐怖しているのだろう。
それも仕方がない。俺がいくら優しく接しようとしても、俺が心から彼女を信用することなど無理なのだ。
不信は疑心となり、それはすぐに恐怖へと移り変わる。
俺が彼女の恐怖を取り除くなど、どだい無理な話だったのだ。
神奈詩を救うはずだった俺の行為は、明らかに彼女を怖がらせていた。

これだけ派手に戦闘したのだから、離れている場所からでもここで何かが起こっていると気付かれているだろう。
すぐに教師が来てもおかしくはない。
だがそれでも俺には今すぐやらなければならない事があった。
俺は壊れていないパソコンを見つけると、すぐに起動させた。
先刻起動させて室内の明かりにしていたパソコンは、俺の蹴りによって壊れてしまっていた。
...メモリの計測が始まり、OSの起動が始まった。急いでいるのでこの時点でFDを入れておく。
不意に後ろで物音がした。.....神奈詩だ。

「神奈詩か.....？」

わざとらしく声を出して確認を取る。
神奈詩は何も言わず、黙っていた。色々あったから無理もないだろう。
沈黙は続いていたが、俺は気にせずFD内のBLANK KEYファイルを無理矢理開き、その暗号を解き始めた。

しかし思うように上手くはいかず、拡張子は相変わらず表示されない。

室内にはキーボードを叩く音しかない。

しばらくファイルを操作してみたが、インターネットからダウンロードしたソフトを使っても、
暗号を解くことは出来なかった。

仕方なく俺は机の脇に置いていたCD-ROMをパソコンに挿入した。

――ファイル解析プログラム『HA』。

このソフトはフリーで傭兵をやっている友人に貰ったものだ。
一般に流通していないソフトのファイルの形式は勿論のこと、内容までも解析することが出来る。

つまりどんなソフトで作ったデータであっても、閲覧するだけならこのソフトで出来る訳だ。

ただ難点もある、あらゆる機密情報を見るためだけに作られたこのソフトは、一般の拡張子には見向きもしない。

そのため、一般のソフトのファイル情報は解析できないのだ。だからまず一般の拡張子を試さなければならぬ。

それらを試した上で、このプログラムを実行しなければ意味がないのだ。

なにせこのプログラムは非常に重い。俺が持っているノートパソコンでは、ファイルひとつに何時間もかかる。

だからこの教室の高性能なパソコンが必要だったのだ。

ファイルを調べている間暇が出来たので、先程殺した四人の死体を調べる事にした。

俺は何も言わずパソコンから離れ、頭蓋を撃ち抜かれた死体に近付いた。

やはり神奈詩は何も言わない。俺もまた、黙って死体を調べ始めた。

死体その1はベレッタとM16のマガジン、そして手榴弾を持っていた。

こいつについては雑魚という事で深くは調べないことにする。

次に、レーザーサイト、サイレンサー付きの拳銃を持った死体2を調べた。

こいつは高性能の武器を持っているが、扱いが下手だ。

近接戦でもまともな動きをしなかったのが、戦人としては雑魚と判断できる。

だがよい武器を持っているという事は、こいつにそれだけ重要な役割があったのかも知れない。

俺は死体の衣服を探り、手当たり次第床に置いた。

持っていた物は煙草、ライター、9mm弾丸三十発、そして生徒名簿。

名簿に目を通すと、『一年二組』と書いてあった。

よく見ると、全員の名前の横に赤ペンでチェックがしてある。

全員殺した...という事だろうか？ いや、全員、特定の場所への移動が終了した、とも考えられる。

ちなみに拳銃は先ほどと同じベレッタだった。
これもグロックと同じく、米国警察特殊部隊SWATでよく使われているモノだ。
教師の中にSWATの隊員がいるとは考えにくいので、過去SWATに属していた者がこの事件に関わっている、
という可能性が出てきた。
あくまで推測だが、あらゆる可能性を考えていた方がいい。
...それにしても相手がSWATだと今の状況は不利だ。
素人共や軍人の単独暴動ならともかく、プロが作る殺戮計画は正確で素早い。
チームワークが売りのSWATなら、更に二歩、三歩先のことも考えて計画できるはずだ。

(俺一人で生き残ることが出来るのか?)

あえて神奈詩のことは考えなかった。
死体その3を調べるためドア付近に視線を移すと、いつの間にかそこにいた神奈詩と目が合った。
彼女の手は赤く汚れている。俺と同じ様に死体を調べていたのだろうか?

「何.....してるんだ?」

俺が問うと同時にこちらを睨み付ける神奈詩。
確かに睨む気持ちも解る。ついさっき、俺は四人の人間を殺したのだから。

「...俺はこういう奴だよ。逃げるなら今のうちだな。」

更に睨む神奈詩。まるで「あなたを殺したい」とでも言っているような表情だ。

「まだ.....殺し足りないの?」

その言葉は俺を苛立たせた。

(俺は異常者じゃない。)

だが他人には人殺しを楽しんでいる様に見えるらしい。

「...そう.....見えるのか」

彼女の表情が変わる。...憎しみの表情から哀れみの表情へと。

そして俺に言った。

「.....人殺し....。」

人殺し。.....そんな言葉聞き飽きている。
しかし、クラスメイトだったやつから言わたのは初めてだ。

「.....で、結局何をしていたんだお前は。」

またも俺を睨みつける神奈詩。話を逸らされて怒っているらしい。
しかし、俺は特に気にせず、言葉が続けた。。

「一体...なにをすつもりなんだよ」

「兼田君には出来ないことよ...。」

「...は？」

俺には出来ないこと.....『男には出来ない事』という事だろうか？
いや、死体をゴソゴソ触ってそれはないだろう。
という事は.....『俺にだけ出来ない事』という事だろうか？ それこそ理解に苦しむが.....

「...何だよ？それ？」

いつの間にか哀れみの表情に戻っている神奈詩。
間抜けそうに聞いている俺はまさに間抜けそのものだ。

「今、考えてること.....言ってみて...。」

どういう事だ？ 神奈詩は一体何を企んでいる？ 俺に何をさせるつもりなんだ？

「お前の行動の真意...だな。」

とりあえず正直に言ってみた。嘘をついても仕方がない。

「...そういう事じゃなくて、根本的に...よ。」

つまりこれからの事か...？そんな事は既に決まっている。

「FDを解析して教師たちのしていることを」

「――していることを暴いて、事件を解決するの？」

.....その通りだ。が、俺には神奈詩の考えていることがわからない。

「.....神奈詩。...言いたい事はハッキリ言え。」

その言葉と同時に、神奈詩の表情が激変する。
俺にはそれが怒りなのか憎しみなのか、それとも羞恥なのかは解らない。
ただ神奈詩が俺を快く思っていないのは確かだ。

「いい加減からかうのやめてよ！もしかしてホントに頭おかしいの？」

「.....さっき、言ったじゃない！」

神奈詩は俺の返答など待たず、怒鳴り続けている。
やはり俺には何故かが解らない。
.....いや、前にもこんな口喧嘩...したはずだ。
俺は少し前の記憶を反芻してみた。

「...逃げようよ.....。」

俺の記憶の中のセリフと、今、目の前で言われているセリフがダブった。
もしかしたら俺もそう口に出していたかも知れない。

「.....。」

神奈詩は黙っている。
先刻の神奈詩は、逃げる情報を得るために死体を探っていたのだろう。
それで『俺には出来ない事』という訳だ。俺はそれすら理解できなかった。

(まただ。また無意識に逃げることを拒んでいる。)

このおかしな状況が俺を狂わせているのか、それとも俺の元々の姿がこうなのか、俺自身が理

解できない。

「すまない。また『逃げる』事を忘れていた。」

間違っではないない答えだ。だがこの状況で『逃げる』行為を忘れるという事は、普通では考えられないことだろう。

「ホントに忘れてたんだったら.....病院行った方がいいと思うよ。」

神奈詩の皮肉が痛い。

戦場にいる時はちゃんと退く事が出来た。戦況が不利になる前に戦場から撤退できたはずだ。なのに何故、今は逃げる事が出来ないんだ？

俺がこの事件を引き起こした訳でもない。

...何かに責任を感じている訳でもない。

...クラスメイトの敵を討ちたい訳でもない。

「.....」

俺はただ黙って悩んでいた。いつの間にか目の前まで来た神奈詩がこちらを伺う。

「.....すこし、休もうよ。」

...確かに、その方がいいかも知れない。

だが、今でも教師達が生徒を狩り続けている事を思うと、とてものんびりはしていられなかった。

「まだ.....パソコンは時間かかるんでしょ？だからさ...」

ファイル解析にもあと数十分はかかる。だが、その間に死体を調べ、様々な事を考えなければならぬ。

逃げるルートを探すにしても、教師達を鎮めるにしても、計画は必要なのだ。

.....必要なのだが、俺は考えを改めた。

「そうだな、少し休むか...」

俺は一度大きく伸びをしてから、死体その2の拳銃を背中のベルトに挟み込み、近くに転がっていたパイプ椅子を二つ立てた。そのうち一つを、神奈詩の方へ滑らせる。

「ありがとう。...あ、」

突然思い出したように自分の制服の内ポケットを探る神奈詩。

少しゴソゴソ探り、「あ、逆か。」と言いながら、もう一つの内ポケットに手を突っ込んだ。

目当てのものが見つかったのか、ポケットから手を出し、「いくよ。」と言いながらこちらに向かって何かを投げた。

「何だ？」

俺も言いながら片手で受け取る。見てみると飴玉だった。

「蜂蜜味？妙な飴玉だな。」

包装紙にそう書いてあったのだ。

しかもその包装紙の柄は俺の嫌いな『雀蜂』。見た目エグい上に、何故蜜蜂じゃないのかが分からない。

「疲れた時は甘い物が良いつて聞いた事あるよ。」

それでも蜂蜜味とは斬新な気がする...

「まあ、サンキュ。」

包みを開いて口に放り込んだ。

「ぐああ.....」

百パーセント蜂蜜とでも言うべきか、嫌な甘さだ。

神奈詩はコロコロと口の中で飴玉を転がしている。あいつはちゃんと食しているらしい。

俺も体力回復のため、薬として飴を転がした。噛み潰そうとも思ったが、この飴は硬すぎた。そのため舐め溶かすにも時間がかかりそうだ。

「こんなモノ、どこに売ってたんだ？」

「え、学校の食堂。」

平気そうに飴玉を転がす神奈詩が妙にたくましく見えた。
それにしても食堂め...エグいモノを売ってくれる。

「二年の時だよねぇ...文化委員。」

とうとつに話し始める神奈詩。俺も気休め程度に話に乗る事にした。

「ああ、文化委員な。」

高校二年の時だ。新学年早々始業式でスヤスヤ眠っていた罰として文化委員にされたのだ。
春休みにパレスチナあたりに行ったのがヤバかったのだろう。あそこのゲリラは腕が立って面倒だった。

その疲れが休み明けに出たのだろう。

「文化委員と言えば文化祭だったな。」

当たり前のことを言ってしまった。だが事実だ。

「まんまだよ、それ。って言うかそれ以外仕事無かったし。」

自分だけでなく神奈詩にまで突っ込まれる始末だ。

どうでもいいがこの飴、甘過ぎる...ある意味ヤバい。

そんな俺の気持ちを感じ取ったのか、神奈詩が俺の顔を伺う。

「あ、もう一個いる？飴玉。」

「いや、はげしく遠慮する。」

とんでもない事を言い出す女だ...

「そう？美味しいのに...」

もう一度思う。.....とんでもない女だ。

この飴を二つ続けて食うという事は砂糖五百グラムを一気にザリザリ食うに等しい行為だろう

。

「お前.....いつもこれ食ってるのか？」

「え？あ、……うん。」

少し吃る神奈詩。だが俺はあえて何も言わなかった。
その沈黙を待っていたかの様に彼女がぼそぼそと話し始める。

「実はね、今日…朝遅刻したにもかかわらずこれ買いに行ったんだ。ホラ、食堂って午前と昼休みしか開いてないでしょ？……それで、…SHRにも遅れちゃって……」

こんな殺人的な飴玉でも人助けは出来るらしい。

「…それで…助かったのか…。」

少し遅れて静かに頷く神奈詩。飴玉だけがからころと鳴っている。

「出来ればいいが、その後この教室に来るまでの事…教えてくれないか？」

うつむく神奈詩。やはり色々あったのだろう。

「いや、俺の友達見かけてないかな…と思って……な。」

神奈詩は一度顔を上げてこちらを見たが、すぐにまたうつむいた。そしてボソボソと喋る。

「ごめん…あんまり憶えてない……」

憶えていない…と言うより話したくないのだろう。俺は勝手にそう解釈した。
無理に悲劇を思い出す必要もないだろう。

「……でも、憶えてる部分だけなら…言えるよ。」

予想外の言葉に思わず神奈詩へと視線を移す。
だが俺の視線の先には彼女のつむじしかない。
視線に気付いたのか、ゆっくりと顔を上げる神奈詩。
その行動によって互いの視線が合う。『見つめ合う』…と言うよりは『自然に話をしている』…
といった感じだ。
やっと普通の生徒同士になれたということだろうか。

「.....なら教えてくれ。」

もう少しソフトな言い方をすべきだった。俺は自分にそう突っ込みながら、歯の浮くようなセリフを考えてみる。

しかし全然思いつかない。なれないことは止した方が良さそうだった。